

すぎかえる一六三号「嘘」

GON OUT  
BACKSON  
BISY  
BACKSON  
(“The House at Pooh Corner”)

がいしつ  
すぎかえる  
いすがし  
すぎかえる  
(「プー横丁にたつた家」)

\* \* \* \*

フクロは、もういちど、そのはり紙をながめました。フクロくらい教育のあるものになると、はり紙をよむなどということは、どうさもないことです。

「がいしつ すぎかえる いすがし すぎかえる。」

いかにも、はり紙に書いてありそうなことじゃありませんか。

「万事、明白ではありますまぬか、ウサギさん。クリストファー・ロビンは、スギカエルといつしょに外出されたのですよ。最近、あなた、森のどこかでスギカエルをお見かけにはなられなかつたかな?」

「さあ、わからない。」と、ウサギはいいました。「それが知りたくて、きみのところにきたんだ。スギカエルって、どんなもの?」

「さよう。」と、フクロはいいました。「あち、または草食性のスギカエルはどんなものかといえば——」

(「アーモンド横丁にたつた家」)

# 目次 Contents

テーマ小説「嘘」	しらす	9
おしゃべりと静寂	.....	.....
世界五分前仮説	.....	.....
純子さんのオルゴール	.....	.....
企画 「架空文学賞」	.....	.....
第一六三回杉蛙文学賞発表	.....	.....
企画 「何もない一日エッセイ」	.....	.....
朝にパン	.....	.....
荷輪治吾郎	.....	.....
67	55	33

漠々

荷輪治吾郎

空想の秋

はにほ

83 73

テーマ外作品

絵本

きらきら

なこ

短歌

臨界

親嘴鳴

117

詩集

滅私集

後藤鐵式

119

あとがき

編集後記

139 133



おしゃべりと静寂

しらす

あ、ようちやん！

よく来たね！ 暑かつたでしょ？

こんな日に呼び出しちゃってごめんね。

ようちやんもすーちゃんも忙しいからさ、中々予定が合わなかつたんだよね。家中はちゃんと

クーラー使つて冷えてるみたいだから、入つて入つて。

いやあ、それにしても久しぶりだなあ。二ヶ月振りくらいとかかな。え、二ヶ月つて大した期間じやないよつて？ いやいや、親友と会わぬい期間としては長いでしょ。それに前に会つたときは、他にもたくさん人が来てて、あんまりゆつくり話せなかつたし。もちろん他の人だつて大事な人だからそれは仕方ないことだし、ありがたいことなんだけど。個別にゆつくり話すことで得られるものつてやつぱりあるじゃない？

「桜さんの友人の三井陽です。電話口で何度かやり取りはさせていただきましたが、直接お話をるのは初めてですね。本日はお招きいただきありがとうございます」

うわ、ようちやん、流石社会人。ものすごいきつちりした挨拶だねえ。でも、そんなにかこまらなくて大丈夫だよ。ほら、すーちゃんも緊張しちやつてるから、楽にしたげてよ。

「ご丁寧にありがとうございます。ああ、でもあたし、年下ですし。敬語を使っていただかなく

## おしゃべりと静寂

て大丈夫ですよ。こちらがお招きしたんですし、もつと楽になさってください」  
全部すーちゃんが言つてくれたね。いやはや、人見知りだつたすーちゃんがしつかり挨拶できるようになるとは……。お姉ちゃん感慨深いよ。

「ありがとうございます、ではお言葉に甘えて。すみれさんも楽に話してしてくれて全然良いからね。……その後、ご両親はどんな風にされてるかな。色々と忙しいだろうと思って、ご連絡してなかつたんだけど。すみれさんも、体調とか大丈夫かな」

ようちやん、うちの家族のことまで気遣つてくれてありがとうね。まあ、忙しいのはわたしのせいだから、悪いなと思つてはいるんだけど。今回ばかりは私は手出しできないからねえ。  
「おかげさまで、何とかやつてます。母はもつと落ち込んじやうかも、つて心配してたんですけど、忙しいのがかえつて良かつたのかな。割と元気です。今日も三井さんによろしくと言つて、役所の手続に行つてます。あたしの方も、全然元気で。いつも通り過ぎて、何だか申し訳ないくらいです」

ええ、すーちゃん、そんな風に思わなくていいんだよ。いつも通り元気つていいことなんだか

ら。むしろ健康最高って叫ばないとなんだよ。

「気持ちはすごく分かるけど、申し訳なく思わなくていいと思うよ。桜が、すみれさんが元気なことで怒ることなんて絶対ないよ。桜、すみれさんのことずっと大事にしてたんだから。むしろ元気ばんざい、みたいな、そんなこと言つてるくらいだと思う」

「おお、流石親友！ その通り！ 以心伝心！」

「……ありがとうございます。そうですね、こんなこと言つてたらお姉ちゃんに怒られちゃう。病気が見つかるまで、ほんとに元気な人だったからな……。亡くなつた人を心配させるようなこと、言つちやダメですよね」

「そうそう、その調子だよ！ あんまりそういうこと言つてると、化けて出ちやうんだからね。そろそろ場も温まってきたころかな。じゃあ、本題に入ろうか！」

\*

\*

## おしゃべりと静寂

「えっと、今日は、おうちに置いておく桜の写真を決める、ってことで良かったかな。私、趣味で写真撮ってるから、桜を写したのも結構たくさんあって、そういうのをなるべく持ってきてみたけど……。ご遺影の写真は、使わないんだね」

「そうなんだよねえ、なんか、気に入らないみたいで。結構いい一枚だと思うんだけどな。  
「はい。あたしたちもそれは考えたんですけど……。あの、正直に言ってほしいんですけど、遺影の写真、どう思われました？」

「え、な、何？　わたしが終活中に選んだ渾身の一枚なんだけど？」

「……ものすごく正直に言うと、証明写真だった。正面・無帽・口角はわずかにあげて、って感じで、遺影というより履歴書の右上に貼つてある方が違和感なかった」

「ですよね。まあ、そういうタイプの人だったなら、あたしたちも故人の遺志を尊重して、って形でそのまま家に置いておいたんですけど。……違うじゃないですか、全然」

「どういう意味よ！　遺影にいえーい！　みたいな写真選ぶわけにいかないでしょ！　あ、違、これはダジヤレじやなくつて、その、えーと、まあ聞こえないからいいか！」

「そうだね。私、少なくとも桜が生きてる間に、あんなに分かりやすく真面目な顔してるの、ほ  
ぼ見たことないし。大笑いしてるとか、何かにびっくりしてるとか、感動して泣いてるとか、そ  
ういう派手な感情が出てる顔しか印象はない」

「ええ。あたしたちもそうです。なので、あんなりクルート写真に見つめられるって違和感がす  
ごくて……。遺影の方は、まあ、お葬式の真面目な場だし、っていうのでそのまま使ったんですけど、家に置いておくなら、もつと永井桜っぽいものを、となりまして。でも、うちの家族、写真  
を撮る習慣がないので、最近の姉の写真があまりなくて……。三井さんがたくさん撮つてくださ  
つてて、助かりました」

なんか、わたしに対するみんなの人物評にものすごく物申したいけど、ちゃんと考えてくれた  
先の結論ってこと? だよね? そういうことにして、故人は黙つておきます。

「いやいや、全然。むしろ、役に立てて嬉しいくらい。……ところで、ごめんね、ちょっとさつき  
から寒いような感じがするんだよね……。すみれさんが暑くなかったら、少しエアコンの温度を  
上げてもらえると嬉しいんだけど……」

## おしゃべりと静寂

「あ、勿論です。というか、実はあたしもちよつと寒くって。すぐ上げますね。おかしいな、適温に設定したのに……」

え、聞こえてないよね？

\*

おお、すごい量だねえ。わたし、こんなに撮つてもらつてたんだ。これだけあれば、二人の気に入るのもきっとあるんじやないかな？

「あ、これとかどうかな？ 旅行先で撮つたんだけど、結構写りいいかも」

わあ、それ懐かしい！ 四年くらい前の夏休みに行つた旅館の写真だね！ これは、夕飯時かな？ 楽しかつたなあ、この時。ようちやんともう一人の友達と、山あいの観光地に旅行に行つたんだよね。温泉もいいお湯だつたし、ご飯も美味しくて、本当いい思い出。

「あはは、お姉ちゃん、楽しそうですね。いい写真だな。……あ、ちょっと待つてください。この

手元……」

「え、何なに？ 片方では普通にお箸持つてて、もう片方では……あ。

「……刺身を驚掴みにしてるね。なぜ」

「見たところ、おそらく理由はこれです。横のおしごり」

「……あー、手を拭こうとして、ひんやりしたものに手が当たったからおしごりだと思つて握り込んだら、ひんやりした刺身だった、と」

「はい。そしておそらく、みなさんが気づいていないのをいいことに、この後そつと手を外して、正しく手を拭き直したはずです。そういうところ見栄つ張りな人だったので」

「バレちまつたらしようがないね、名推理だよすーちゃん。いや、今の今まで忘れてたんだけど。だつてだつて、流石に恥ずかしいでしょ、おしごりとお刺身間違えるなんて！ それくらいの見栄張らせてよ！」

「……うん、これは、見送ろうか」

「そうですね……。見るたび大笑いしちゃいそう。あ、でも、この写真もいただけますか。親に

見せます

「いいよ」

え、ちょっとやめて！

\*

まさか、かつて隠ぺいした恥が掘り返されるとは……。いいよもう、次行こ、次。

「えっと……これは、多分試験勉強の時に撮ったんだな。天気が良かつたから外で勉強してて、ちょうど秋だつたから銀杏が綺麗で」

「あ、お姉ちゃんと三井さんの学部、試験が多かったですもんね。へえ、こんな感じで勉強してたんだ。お姉ちゃん、勉強は大体いつも自分の部屋でやってたんですよ。こんなにしつかり学習風景を見るなんて、小学生以来かも」

「桜、すごく成績よかつたよ。普段ふわふわしてるのに、レポートの文面なんかはものすごくか

つちりしてて、ギャップだつたなあ」

えへへ、それほどでも。まあ、勉強は嫌いじやなかつたから。でもねえ……。

「うーん……。すごくいい写真なんんですけど、これも、見送つてもいいですか」

「あ、うん、それは全然。……だよね。桜、試験とか評価される系のものをやるとき、毎回しんどそうだつたもんね」

「はい。毎回、試験期間は、ちょっと元気なかつたです。いつも通り笑つてはいるんだけど、何だか無理してゐる感じで。多分このときもそうだから、そんな写真を飾つちやうのは、お姉ちゃんに悪い氣がする」

あらら、分かつてたの？

そうなんだよね、勉強するのはいいんだけど、評価されるつて思うと、こう、胃のあたりが痛くなつてくるというか。勉強だけに集中できなくなつちやつて、結構きつかったな。それでも頑張つて、進路に必要な成績は維持してたつもりだけど。学んだことを活かし切る前に死んじやつたから、ひよつとしたら無駄に胃を痛めたんじやないかつていうのは、まあ、たらればだよね。

## おしゃべりと静寂

いやはや、心配かけたくないで隠してたつもりだつたのに、ばれちゃってたか。二人ともわたくしたことよく分かつてたなあ、すごいね！

「まあ、つまり、少々格好つけってことですね。眞面目なのもブレッシャーに思つてるのもバレなんだから、素直にしんどいって言えればいいのに。寝不足みたいだけど大丈夫、なんて訊いても、必ず『平気平気』とか言うんですね。」

「あれで弱みを見せるの、嫌がるタイプだったよね。みんなテストなんて嫌いなんだから、恥ずかしがることないのに。格好つけっていうのは、納得しちゃうなあ」

人物像を知られすぎっていうのも考え方だね？ 容赦がないよ。もうちょっととこう、オブラートに……包まないのが、二人のいいところだね。仕方ないなあ。

\*

さて、お次は？ おお、これは。

「うわ、大きい雪だるま。作ったんですか、これ」

「そうそう。桜がね」

「ふふん。すごいでしょう。

「え、お姉ちゃん一人ですか」

「そうなの。というか、何でそうなったのか覚えてないんだけど、構内の空き地使って、そのと  
きいた面子でそれぞれ一つずつ作ってたのね。あとで見せ合いしようねって。珍しく市内にもか  
なり積もった日だったから、テンションが上がってたんだと思うんだけど。で、作り終わってみ  
たら、桜の作ったのだけこんなに大きくてさ。みんな精々足元サイズのしか作らなかつたのに、  
もう、びっくりだよね。あとサイズだけじゃなくて、顔の配置とかも完璧な出来じゃない？ そ  
の辺も褒め称えたよ。私に限らず、みんなで写真撮りまくつて、桜もご機嫌」

「わあ、ほんとだ、得意満面」

だってね、みんながすごいすごいって写真撮ってくれるんだもの。ここで調子に乗らないでい  
つ乗るのって感じでしょ？ 実際、会心の出来だつたし！

「桜、こういうの、絶対手抜かなかつたよね」

「はい。家族内のゲームとかも、いつも全力でしたよ。何回喧嘩したか」

「あら、また雲行きが怪しいような。」

「私怨ですが、これはなしで。大昔、オセロで泣かされた記憶がよみがえってきました」

「あはは、残念」

う、だつて、オセロで角が空いてたら取るでしょ、普通。まあ、幼稚園生の妹にそれをやつて、

全面黒にしたのは、ちょっと大人気なかつたけど。

「あと、実は、すごくいいの、見つけてしまつて。飾るのはそつちにしたいから、この写真はな  
しです」

あ、よかつた、恨みだけで雪だるま写真が外されたわけじゃないんだ。高だか一回のオセロで、  
十何年残る恨みを与えてたんだつたら、さすがに申し訳ないもんね。それで、すーちゃんセレク  
トはどれかな？

「あ、もしかして、これ？」

「それです、それです」

わあ、これって……。

「うん、私も実は第一候補にしてた」

「すごくいい写真ですね、一目でピンと来たんです」

うんうん！ わたしも同感だよ！ この写真、大好き。

ようちゃん、いっぱい撮ってくれて、ありがとうね。すーちゃんも、一生懸命選んでくれて

ありがとう！ 嬉しいなあ。

その写真、わたしの代わりに大事に飾つててね。よろしくだよ！

\* \* \*

すみれさんが、丁寧な手つきで写真をケースに入れる。  
しゅる、かばつ、ことん、と音がして、一輪挿しの飾られたテーブルに、先ほど選んだ写真が

置かれた。

「はい、いかがでしようか、お姉ちゃん」

「背後でグッジョブ！ ってしてるとと思う、多分」

「あたしもそんな気がします」

桜の面影のある目をにこつと細めたすみれさんは、ふと真面目な顔に戻って、ぺこりと私に頭を下げる。

「三井さん、今日は、本当にありがとうございました。写真を持つてきてくれたことも勿論ですけど……お姉ちゃんが言いそ、うなことをいちいち言い合いながら選ぶ、なんて提案に乗つてくださつて」

「ううん、全然。むしろ、こんなことさせてもらつて、すごく嬉しかった。……桜が、まだ一緒にいてくれているような気分になつたよ」

何度もかの電話上のやり取りでのこと。亡くなつた友人の妹との初対面に思いを馳せ、少し緊張する私に、すみれさんは、こんなことを言つてきた。

『あの、明日、写真を選ぶときなんんですけど……。姉の言いそうなことを、思いつく限り言い合  
いながら選びませんか。あの姉のことだから、多分、自分の飾られる写真を選ぶときなんかに、  
黙つて見ているはずがないと思うんです。その写真にはこういう思い入れがある、とか、すーち  
やんのその思い出は自分の認識とはズレてる、とか、色々口を挟みまくりながら選ばせると思  
う……。できるだけ、それをなぞつてみたいんです』

姉に似た声で、無理にお願いはできないんですけど、というすみれさんに、私は、一も二もな  
く頷いていた。

もしかすると、私は、桜がいなくなつてから、ずっとそういうことがやりたかったのかもしれ  
なかつた。彼女のにぎやかな声が消えた生活は、あまりに静かで、ぽかんと空白が空いたようだ  
った。せめて、桜の言いそうな言葉を、桜の言いそうな口調で連ねて、その穴を埋めたふりをし  
たかつた。

「……ふふ、すみれさんの言つた、『かつて隠べいした恥が掘り返されるとは』って台詞、笑つち  
やつた。本当に言いそう。というか、言つてる」

## おしゃべりと静寂

「三井さんの考えるお姉ちゃんの台詞も、全部それっぽかったですよ。特に、何か指摘されるとすぐむきになつて言い返そようと/orと/or、そのまんま。怒つてるつもりなのかもしれないけど、全然怖くないんですよねえ」

お互いに、笑い合う。

そうして一息つくと、また静寂が戻ってきた。

すみれさんも私も、それほど多弁な方ではない。桜と私が話すときは、大体桜の口数の方が圧倒的に多かつたし、今日会つて見た感触として、おそらく桜とすみれさんが話すときもそうだつたのだろう。

本当は、分かっている。

いくら「永井桜の言いそなこと」を連ねても、それは「言いそなこと」に過ぎず、嘘でしかないということを。

本物の永井桜は、もしかすると、私たちがちょっとした失敗をからかつたことを、本気で怒るかもしれない。辛めの人物評を仕方ないとは笑つてくれず、随分落ち込むのかもしれない。雪だ

るまを作るのなんて本当は面倒くさくてやりたくないかったと、数年越しに告白するのかもしれない。

彼女のいないことでできた静けさを、本当に埋めることができるものでは、永井桜しかいない。  
そうではなくてはいけない。

でも、それはもうかなわないのだ。

「……いい写真ですね、本当に」

すみれさんが言った。桜よりすこし高く、涼しい印象の声。

写真の中の桜は、咲き誇る大きな桜の樹の前で、半身を振り返り、満面の笑みを浮かべていた。  
撮ったのは、病気の見つかってすぐ後。桜に誘われて一緒に行つた、花見の最中の写真だった。  
彼女の名前を冠したこの花のことが、彼女は大好きだった。

写真をじっと見つめながら、すみれさんが言った。

「会いたいな」

今度は、誰に聞かせるでもない、ぽつりとした独り言だった。聞かせるべき相手がもういない

## おしゃべりと静寂

から、そうなつてしまつた。

あくまで涼しいすみれさんの言葉の余韻を、じっくりと噛み締める。

十分に沈黙を味わい尽くして、すみれさんが、私の方に向き直つた。

「ねえ、陽さん」

「うん」

「よければ、また、一緒にやつてくださいませんか。お姉ちゃんがこの場にいたら、つていう、もしもの話。時々、寂しくなつた時に」

「……うん。私も、そうしたいな。お願ひね」

よかつた、と笑う顔は、本当に桜によく似ていた。

「お菓子、用意してあるんですよ。お姉ちゃんも好きだったお店の。よかつたら、一緒に食べましょう」

そう言つてくれるすみれさんに応じながら、私は、改めて写真の中の桜に向き合つた。  
にぎやかで、すこし抜けていて、見栄つ張りで、眞面目で、何事にも一生懸命だつた、自慢の

友達。あなたがいなくなつて、私たちの世界には、随分静かな穴が開いてしまつた。それは、決して埋まることはないけれど。そこに少し、嘘を映してみるくらいなら、許してくれるよね。

話しかけてみても、相変わらず、帰ってくるのは静寂ばかりだ。

それでも、嘘つきな私の眼には、写真の中の桜が、先ほどよりもっと朗らかに笑つているよう

に見えた。

# 世界五分前仮説

吳田仁

ここは恐らく駅に併設された様な商業施設のレストラン街だと思う。経済の成長期に、ポコポコと建てられた施設（というのは適当な印象だが）といつた趣で、風情あるうどんそば屋や喫茶店が並んでいた。私がそこを訪れた時間帯は生憎、閉店の頃合いで、うどん屋なんかは暖簾を下す作業の途中だつた。それでもガラス越しに並ぶ食品サンプルを眺めるのも案外楽しいもので、私はプラプラと見て回るのだった。

暫くして、ふと私はある洋食屋の前で立ち止まつた。ガラスケースに、とんかつ定食やカレーハン、オムライスが並んでいる。私は幼児と接する時かの如く小さく屈んで、オムライスを凝視した。忽ちにして、その紛い物にすら心奪われたのである。

「あなた、昨日も来てくれとつたね」

途端に私は思い出した。「ああ、そうだ。昨日もここでオムライスを眺めたのだった。さつきまでは無かつた筈の記憶が次々に甦つてくる。「そうだ、昨日も夢で訪れたのだ」何で忘れていたのだろう。

## 世界五分前仮説

「アンタ、折角だから食べて御行き。もう閉めちゃつたけど特別だよ」

この店の店主と思しき割烹着の老婆に誘われるがままに、私は店に入つていった。中には小さな卓袱台が一つだけ置かれていた。

「すぐに用意するから」と云つて老婆は店の奥に姿を消した。そして皿を持って本当に直ぐに帰つて来た。皿が私の前の卓袱台に置かれる。それは紛れもないオムライスであつた。薄い玉子に赤いケチャップの昔ながらのオムライス。その周りには飾りの様に鮮やかな色をしたトマトとキュウリが並べられている。親切な老婆は御食べと微笑んでいる。私は良心の呵責に堪えかねて、そこから逃れる様に強引に目を覚ました。はてな。どうしてこんなに焦つて起きたのだろう。

その晩、夢を見た。目の前のガラスケースには、とんかつ定食やカレー、オムライスが並んでいる。



純子さんのオルゴール

谷山大哉

青く澄んだ空の半分くらいを、白く大きな入道雲がどんと陣取っている。

両手を組んだ仙人がこちらを見下ろしているかのような形をしている。

額に浮き上がった汗をハンカチで拭いながら、荒木恵子は仙人雲を睨んだ。どこかで蝉がミイーンミイーンと鳴っていて、近いのか遠いのか距離感の掴めない鳴き声が喧しい。

汗で肌にぴったり張り付いたシャツが気持ち悪くて、シャツの裾をパタパタ揺すつて風を送り込む。

見慣れた石塀の上から金木犀やら椿やらの枝が這い出るように伸びている。

石塀を抜けた左側には、木造の家が寂しく息をひそめている。

庭には名前も知らぬ雑草たちが茂り、家の東側にある裏山には竹が群れをなして隊列を組んでいる。この高い位置にある竹林のために、この家には朝陽が一足遅れてやつてくる。

この家の周囲には緑が一面に広がっているから、自然豊かといえば聞こえは良いが実際の所は手入れが行き届いていないだけだ。

## 純子さんのオルゴール

私が初めてこの家に訪問介護士としてやつて来た時には、純子さんの足腰も今ほどには弱つていなかつた。

純子さんは庭の雑草抜きやら、植え込みの金木犀や椿などの剪定を一人でやつていたし、庭には色とりどりの花々が咲いていた。

私が庭仕事を手伝うといつても純子さんは断つて一人で庭仕事をしていた。

自分の庭ではないのだけれど、私はこの家の庭がお気に入りだつた。

それが今では見る影もなく、玄関まで続く踏み石は雑草に隠れているからどこを歩いても同じだ。

私は玄関にちよこんと佇むアビーに目でおはようと挨拶してジーンズにくつついた引っ付き虫を取り除いた。アビーは犬の置物で、純子さんがアビーと呼んでいたから私もそう呼ぶことにしている。スピツツかコーギーのどっかだと思う。犬種は詳しく分からぬが、とにかく弱いくせによく吠える犬だ。もちろんアビーは陶器でできたワンちゃんだから吠えたりしない。薄緑がかつたベージュの毛並みに、ビー玉みたく澄んだつぶらな瞳とハムみたに垂れた舌が可愛らしい。

ガラガラと引き戸を開けて今度は声に出しておはようございますと挨拶をする。もちろんいつも通り返事は無い。

土間の隅つこの方に純子さんの小さな靴が一足だけきちんと並べられている。

私は上がり框に腰掛けて靴を脱ぎ、静かに居間に向かつた。

玉暖簾をじやらじやら鳴らさないように気を付けてくぐると、純子さんが介護ベッドの上で体を起こして中空をぼんやり眺めている。

もう一度おはようございますと挨拶するが無反応。

純子さんは自分だけの世界に没入しているようで、こちら側から声をかけてもまるで届いていない。

摺りガラスで碎け散った陽光は曖昧な形をしていて、純子さんの瞳に届くころには水の中に牛乳を垂らしたみたいに濁っている。

茫洋とした純子さんの瞳に現実世界での希望とか一筋の光とか、そういうふうな生きる励み的な何かしらが萌すことはもしかしたら無いのかもしれないと考えてしまふ自分自身を介護士として、

## 純子さんのオルゴール

というよりはむしろ人間として軽蔑してしまう。

純子さんは認知症が進行しており、一日のうちのほとんどの時間を介護ベッドの上で過ごし、過去の記憶の中を彷徨つている。

足腰は弱っているが、それでもお腹がすいたら私が作り置いた煮物やお粥などを自分で食べ、トイレがしたくなつたらとぼとぼトイレまで歩いて一人で用を足す。

認知症がこれ以上進行し、今よりももっと足腰が弱つてしまつたら純子さんはどうなつてしまうのだろうか。それも時間の問題だろう。

純子さんはお腹のあたりに置いたオルゴールを優しく撫でている。

三十二弁の箱型オルゴール。外側は赤い革製で、かつては鮮やかなワインレッドだったであろうオルゴールは長い時間を経て、まだらに色褪せている。

ショパンのノクターン。夜想曲というらしい。純子さんが教えてくれた。何度も何度も同じメロディが繰り返される。

本当は軽やかで包み込むような優しいメロディのために人は感動するのだろうけれど、この部屋

の中でのそれは歪んでいて、私は憂鬱になる。

この気持ちをアンニユイと言うのだそうだ。最近、本を読んでいて知った言葉。

純子さんはきっと、このオルゴールの奏でる限定的なメロディと同じように、人生のうちのほんの一部分を切り取った記憶を再生し続けているのだろう。

\*

私が初めて純子さんの家を訪れたとき、純子さんは庭仕事をしていた。

私が勤めるケアセンターの所長から、純子さんは八十七歳の高齢女性で独り暮らしと聞かされたいた。だからベッドの上で寝たきりだとか、一人で歩くのもままならないとかそういう状態を想像していたが、純子さんはしゃがんでせつせと手を動かしていた。

「今日から担当させていただく荒木恵子です。よろしくお願ひします。」私は頭を下げて丁寧にお

## 純子さんのオルゴール

辞儀をしたのだが、純子さんはちらりと私を一瞥しただけで何も言わなかつた。

「何かお手伝いしましようか?」私が声を掛けても純子さんは黙々と雑草を抜いたり、花の手入れをしていた。

私は肩にかけていたショルダーバッグを置き、腰をかがめて雑草を抜き始めた。

「触らないでおくれ」純子さんは顔の皺を少し深くして静かに言った。

私はむつとして言い返そうとしたが、言葉を飲み込んでもう一度何かお手伝いしましようかと尋ねた。

「便所掃除」純子さんはこちらに目もくれずそれだけ言って黙々と庭仕事を再開した。

なんだか腹立たしく感じたが、こちらとしては仕事なので仕方なく荷物を持って家に入り、トイレを探した。

玄関を上がつてすぐ右側に玉暖簾が掛かっており、前方は二階へと続く階段、左側には和室があつた。

私は直観で右側を選んだ。玉暖簾をくぐると居間になつており、その先にはアコーディオンカー

テンが開かれていて台所へと続いていた。

居間にはドアが一つあって、そこを開くとすぐに洋式トイレの個室が二つ並んでいた。

純子さんは独り暮らしだと聞いていたので、純子さん一人にふさわしくないくらい大きな家とか洋式トイレが二つもあることとか、なんだか少し虚しいなと思った。

私がトイレ掃除をしていると、純子さんが様子を見にやってきた。

特に掃除のやり方がなっていないとか小言を言わることは無かったが、去り際に「それが終わったら風呂掃除」そう。ボツリと呟いて庭仕事へ戻つていった。

風呂を掃除しているときもふいにやつてきて新しい指示を出された。

結局私はトイレ掃除、風呂掃除、床掃除、買い出しと雑用係か召使のようにこき使われた。

「今日はそろそろ失礼します」庭仕事中の純子さんに声を掛けて帰ろうとすると、ちょっとお待ちなさいと引き留めて私を和室に案内した。

私が戸惑いながらも和室の座布団に腰を下ろすのを確認して、純子さんは何も言わずにどこかへ消えてしまった。

## 純子さんのオルゴール

しばらく待つても純子さんは戻らず、退屈した私は和室のあちこちへ視線を巡らせた。

隅の方には掛け軸が掛かっており、丁度その下で魚を咥えた熊の彫刻が埃を被っている。

そして、そのすぐ隣には小さな仏壇が置かれており、飾られた写真の中の男性がはにかんでいる。まだ四十代くらいに見えた。純子さんの旦那さんだろうか。仏壇の横には骨壺が二つ置かれていて不思議に思つたが立ち入らない方が良いと考えて、気にしない事にした。

和室は障子戸と襖で区切られていて、西日を透かした和紙のために障子戸は橙色に染まっていた。障子戸を開くと縁側になつていて、庭の花々や裏山の竹林が夕風にそよいでいるのが見渡せた。ほんのり温かく感じられる西日に眠気が誘われて、私は縁側で眠つてしまつた。微かな畳の優しい香りがとても心地良かつた。

ふと目を覚ますと、お味噌汁のいい匂いがした。

純子さんは座布団に座り、お茶をすすつていた。

「すいません、気持ちが良くって眠つてしましました」

「構わないよ。夕飯を作つたから食べていいきなさい」純子さんは素っ気なく言つた。

ちやぶ台には白米とお味噌汁とお漬物が並べられていて、断るのも気が引けたのでありがとうございますとお礼を言って純子さんに向かい合つて座つた。

とても質素な感じがしたけれど、どこか心温まるような気がする。  
なめこのお味噌汁がとても美味しかった。

これがおばあちゃんの味というやつか、と言ひ表せない感動のために思わず目頭が熱くなつた。

「あの庭はね、私の庭じゃないんだよ」

私が夕飯を食べているとき、純子さんはポツリポツリと話を始めた。

「あの庭はあの人人が大切にしていた庭でね」純子さんは写真の中ではにかむ男性を物悲しい瞳で見つめる。

まつたくおかしいよねえ、男のくせに花なんか愛でてさあ。私の事なんて二の次で、いつも庭のことを考えてたよ。あの人人は料理も仕事も服装もみんな無頓着でこだわりの無い人だつた。それでもあの庭だけは気違ひみたいにこだわつててね、私の事なんてほつたらかしで庭仕事ばっかり

## 純子さんのオルゴール

だからある日言つてやつたのよ。『私とあの庭のどつちが大事なの』って。そしたらあの人迷わず  
に庭だつて答えたの。私もう頭に血が昇つちやつて泣いてたのか叫んでたのか分からないけど、  
とにかくその日は大喧嘩よ。あの人は出て行つた。喧嘩するといつもそうなのよ。喧嘩になると  
私が泣き叫んで、あの人怒鳴る。それでも私が喚き続けるから、どうしようもなくなつて出て  
いくの。そして私が布団にくるまつて一人ですすり泣いていると、あの人はぐでんぐでんに酔つ  
て帰つてくるの。お酒なんてまるで飲めないくせにね。玄関で『おーい純子起きてるかあー』つ  
て大声出すんだけど私は無視して寝た振りをするの。そしたらあの人はふらふら壁とかにぶつか  
りながら私の隣にやつてきて『さつきはすまんかった』って謝るんだけど、私は無視してやる  
の。それでもあの人子供みたいに謝り続けるから私はたちまち可笑しくなつちやつてね、なん  
だか怒つてるのが馬鹿馬鹿しくなつてきて二人でクスクス笑いながら抱き合うの。夫婦喧嘩なん  
て抱き合うための口実みたいなものだつた。

でもその日は帰つてこなかつた。私は布団の中で一晩中あの人への帰りを、あの人抱かれるのを  
待つていた。けれど、夜が明けてもあの人帰つてこなかつた。私も泣き疲れて知らない間に眠

つてしまっていたみたいで、昼頃に扉をどんどん叩く音で目を覚ました。なんだか嫌な予感がして、肌着のまま急いで玄関まで駆けて行つたわ。玄関を開けるとお巡りさんが二人立つていて、私もうそこで崩れてしまつて。おまわりさんは、私が動転しているのも気にも留めないつていうふうに淡淡と告げた。旦那さんが水死体となつて海に浮かんでいるのが発見されましたってね。それ以来あの人はずつと帰つてこないまま。本当はね、あんな庭なんて憎らしくつて仕方がないんだけどね、あの人人が大切にしていた物だからね。あの人人が帰らなくなつて、誰も手入れする人があつくなつたから仕方なく私がやつてているだけなのよ。

純子さんの目には小さな涙の粒が浮かんでいた。  
きっと純子さんは誰かに話を聞いて欲しかったのだろう。

## 純子さんのオルゴール

私はストーブの前で身をかがめて指先を温めていた。

純子さんの家のエアコンはボコボコ音を立てるだけで温かい空気は吐き出してくれないようだ。あと一週間もすれば今年も終わり、新たな年を迎える。私が冬期休暇に入る前に大掃除をすることになり、純子さんの指示に従つてあちこち掃除していたのだがすっかり指先がかじかんでしまった。

「こらこら、休んでないで掃除掃除。日が暮れちゃうわよ」  
「はーい」私は両手を擦りながら立ち上がった。

私が純子さんの家に来てすぐの頃に比べると、私と純子さんの距離感はかなり近づいたと思う。純子さんは、時々だけれど編み物や料理を教えてくれた。マフラーやセーターやの編み方だったり、簡単な料理とか、時には手の込んだ煮込み料理(特にロールキャベツが私の一番のお気に入りだ)の作り方を丁寧に教えてくれた。

もしも私におばあちゃんがいたら純子さんのように様々な生活の知恵を教えてくれたのだろうか。

私にはおばあちゃんがいない。正確にはおばあちゃんという存在の実態が分からぬのだ。

私のおばあちゃん（母方の祖母）は私が産まれた八日後に亡くなつた。

臍臓がんだと母から聞いたことがある。

医者が宣告した余命通りだつたら、おばあちゃんは私が生まれる一ヶ月も前に亡くなるはずだつた。しかしおばあちゃんは、もうすぐ産まれてくる孫の顔を一目見ようと、ほとんど根性と意志の強さだけで耐え抜いたそうだ。

私がまだ物心つく前に両親は離婚し、私はシングルマザーの家庭に育つた。

だから父方のおばあちゃんも記憶には無く、おばあちゃんという存在がどういうものなのか分からぬのだ。

子供の頃にテレビドラマや絵本でおばあちゃんと孫の仲睦まじく微笑ましいストーリーを見たり読んだりしたけれど、ストーリーの中のおばあちゃんの振る舞いとか孫との関係性とかが本当なのかどうか分からなかつた。

おばあちゃんというのは孫のために手袋やセーターを編んだり、洋服やおもちゃを買い与えたり、

## 純子さんのオルゴール

孫が両親に叱られて泣いているときに優しく抱擁したりするものらしいと、自分とは無関係のまさに物語の中だけの存在だと思つていた。

おじいちゃんはいたけれど、おじいちゃんが母に對して厳しすぎる教育をしていたようで、母は私とおじいちゃんとを滅多に会わせようとした。おじいちゃんでさえも私が小学生の低学年の時に亡くなつた。

おじいちゃんが一人で暮らしていた団地のベランダ（四階）から酒に酔つて飛び降りたそ�だ。

私はおじいちゃんのお葬式で初めて死んだ人の顔を見たのが印象的で当時の大人たちが話したこととかお葬式の光景とかが強く頭の中に焼き付いている。

母は両親を亡くし女手一つで私を育てなければならず、金銭面で頼れる相手がいなかつたから昼夜も仕事で、休む暇もない母と一緒にどこかへ出かけることは少なかつた。

だから私は夏休みが大嫌いだつた。

宿題で出される絵日記は、どのページをめくつてもアパートの近くの公園の砂場の風景だつたり

滑り台の風景だつたり、アパートの一室から眺めた窓外の風景だつたりした。

帰る田舎もないから、よくあるような祖父母のもとに一人預けられて田舎の縁側でうたた寝したり小川で魚を捕つたり自然の中を探検したり星空を眺めたりといったありがちな一夏の素敵な体験というものは私には無いのだ。

私はおばあちゃんという存在に憧れを抱いているのだろうか。もしも純子さんが私のおばあちゃんだったら、と考えることが時々ある。純子さんが私のおばあちゃんだったらとても素敵だ。庭仕事とかお料理とか二人であれこれお喋りしながら笑い合つたり、介護士としてではなく孫として純子さんのお手伝いが出来たら良いのにな。

居間の床やら家具やらを雑巾で拭きながらぼんやり考えた。

身をかがめて介護ベッドの下を拭いていると手に何かがぶつかる感触がして、手を伸ばしてその何かを掴み取つた。  
埃を被つた箱だつた。

## 純子さんのオルゴール

外側が赤い革製で、箱の上面には金色のアルファベットが並んでいる。指輪とかネックレスなどのジュエリー・ボックスみたいだつた。

「勝手に触るんじゃない!!」後ろから突然純子さんに怒鳴られ、うひやっと間抜けな声をだしてその箱を落としてしまつた。

落下の衝撃でピロンと小さな音を出して箱の蓋が開いた。オルゴールだつた。藍色のビロードの上に古めかしい機械仕掛けが納まつていた。上蓋の内側にはまだ幼い少女の写真が貼られていた。白黒の少女が口元を三日月の形にして笑つていて見えた。

純子さんは慌てて駆け寄つてきて私からオルゴールを庇うようにして両手で隠した。

「もう帰つておくれ」純子さんは私を睨み上げて静かに言つた。

純子さんに異変があつたのは、年が明けてから初めて純子さんの家を訪れた時だ。

純子さんは介護ベッドの上で正座をし、視点の定まらないぼんやりした目をして空間を眺めていた。

「おはようございます」私が声を掛けると、日なたで甲羅を乾かす亀のようにゆっくり首を回してしばらく黙つたまま私を眺めてから、目をぱちくりさせて「どちら様で」と言つた。  
さつきまで手を繋いでいた人に崖から突き落とされたかのような気持ちだった。

悲しくて、やりきれなくて、気づかぬうちに涙がこぼれていた。  
どうしてこんなに悲しいのだろう。私と純子さんは他人のはずなのに、とっても悲しくてやるせなくなつた。

「どうされましたか、大丈夫ですか」純子さんは首を少し傾けて心配そうな目で私を見つめている。

「大丈夫です」私は涙を拭いながら答えた。

純子さんは少し微笑んで、膝の上に置かれたオルゴールを撫で始めた。

「大切なオルゴールなのですか？」そう尋ねると純子さんはふふっと微笑んで、オルゴールを優

## 純子さんのオルゴール

しく撫でながら話した。

「このオルゴールはね、優子がプレゼントしてくれたの。」

純子さんはオルゴールの蓋を開けて写真の少女を見つめる。

「名前の通りとても優しい子なのよ。私が寝込んでいるときに優子が心配そうにするから『お母さん熱っ気があるわ』って言うと私と同じ布団に入ってきてね『じゃあ優子が背中トントンしだげる』って。このオルゴールのゼンマイを小さな手で巻いて、背中を優しくたたいてくれるの。私が喜ぶとね、優子は毎晩のように私の隣にやつてきて背中をどんどんしてくれるのよ。でもオルゴールが子守歌みたいだから心地よくなつて、いつも優子が先に眠っちゃうんだけどね。きっともうすぐ学校から帰つてくる頃よ」純子さんはそう言つて、またオルゴールに視線を落とした。

それから日が経つごとに純子さんの認知症は悪化していく。

私を泥棒呼ばわりして騒いだり、私に殺されると思って大声で助けを求めたり、私をかつての友と間違えて思い出話をしたり。

そしてふと正気に戻ると、今度はめつきり何も喋らなくなる。

私が純子さんと同じ部屋にいても、純子さんは無反応。こちらからいくら働きかけても、それは純子さんに届かない。

一番近くにいるはずなのに、私のことが誰なのかまるで分からなくなってしまったのだ。

\*

ノクターンの音色が中途半端なところで途切れて、私は白昼夢から現実に引き戻された。

純子さんのほうも現実に引き戻されたようで、一瞬恨めしそうな表情になり顔の皺が深くなつたが、すぐに無表情になつてこちらにゆっくり視線を向けた。

「あら、優子。お帰りなさい」

純子さんは私を娘の優子さんと勘違いしているのだろう。

「ただいまお母さん」ふいに嘘の台詞が零れた。意図した言葉ではなかつた。

## 純子さんのオルゴール

そして無意識に体が動いた。

かつての少女がそうしたように、私は純子さんに歩み寄りオルゴールのゼンマイを回す。ノクターンの歪んだ音色がチロチロ流れ始め、甘ったるくて胸やけがしそうなメロディが部屋に充满してゆく。

純子さんは中毒者みたいに瞳を溶かして中空を眺めている。

私はだんだん吐き気がしてきて、庭の雑草を全部燃やしてしまいたい気持ち、オルゴールをぶち壊してしまいたい気持ちを必死に隠しながら純子さんの肩をトントンたたいてやつた。

夜中に酔って帰ってきて彼女を抱く男も、彼女にオルゴールを聞かせてくれる娘も二度と帰つて来ない。それでもノクターンのメロディは途切れながらも続いてゆくから、純子さんは戻らぬ夜を彷徨い続けるしかないのだろう。

オルゴールが鳴り止むまでに玄関先のアビーにさよならを言つて帰つてしまおうと思った。



# 第一六三回杉蛙文学賞発表

黒田ももん

第263回 杉蛙文学賞発表  
受賞作 記念品及び副賞百万円

六甲山帰り

信田異星

「新調」九月号

選考委員

童文男  
図書館二郎  
明太子  
鮎山腹美  
美田民吉戸  
月見場亞我

第一六三回の受賞が右のように決定しました。この賞は、故杉蛙度部藏氏の業績を記念するとともに、文芸のさらなる振興のため設立されました。審査の対象は短篇・中編小説とし、その年度における最も完成度の高い作品に授賞します。各方面の皆様のご協力に感謝するとともに、今後のご支援をお願いいたします。

公益財団法人 杉蛙文学会

〈選考経過〉

童文男・図書館一郎・明太子・鮫山腹美・美

田民哲戸・月見場亞我の六委員が出席して討議

を行い、右の通り受賞を決定いたしました。

受賞作以外の候補作は次の四作品です。

瓜帽太郎「猪狩り」(「文鯨」夏季号)

田中M権三郎「バナナ農園」(「昴」十月号)

樺野眠子「センチメンタル・レイン」(「軍藏」五月号)

白田ももむ「漂田」(「文学風」一月号)

これらは、昨年度の各雑誌ならびに単行本に発表された短編・中編小説の中から予選を通過したものです。

【受賞の言葉】

信田 異星

「連絡をいただいたときは、まさか、という思いで、お電話の後、十分ほど固まっておりました。当の私ですらそんな有様ですから、家族や知人には、詐欺じやないかと言われたものです。自分の文学の道に迷い続けて十年、未だこの霧は晴れませんが、この度の受賞で一つの光明を掴んだという気もします。本当に身に余る光榮です。先人たちや評価してくださった皆様に敬愛の念を表すとともに、これからも精進して参ります。

**選評  
「選評」**

童 文男

受賞作の「六甲山帰り」は、私は純粹に推せなかつた。洗練された文章で破綻もなく、むしろ読みやすいまでもあるのだが、男女の頭上を淡々と言葉だけが上滑りしていく感じが否めない。死と隣り合わせの登山を終えて帰路につく男と、病魔に見舞われ、入院前最後の外出を駅で過ごして

いる女、これら二人の生死の交錯が曖昧にしか像を結ばないのは、登場人物の人生の端々を「匂わせる」ことに終始しており、垣間見られた断片が結局は一つの絵画として結実していらないからである。読後に残るのは寂寥ではなく深い虚であり、投票で手を挙げることはできなかつた。

「バナナ農園」は、青年らの言語化が困難な感傷を真正面から扱つた作品で、好感を

もつた。病身の妹のため労働に励む若い農夫と、人生に影を抱えた女子学生たちの日々は心を打つものがある。さらりとした文章もよい意味で軽みがある。ただ、受賞作となるともう一歩足りない、と感じた。

「センチメンタル・レイン」は、読後の印象に突き抜けた爽やかさを感じた。三十路近い女の自意識の一瞬だけほのかな揺れを見事にとらえて

いる。この作には社会や世相といったものはない。思想ではなく抒情を小説に昇華させた散文詩のような作で、私はそこに作者の才を感じた。男女の陰影が色濃く描かれていて、ともすれば陳腐になりがちな主題を、雨に濡れた女の香りが際立たせている。いたく感心したのだが、意外に票が集まらなかつた。

瓜氏の「猪狩り」は堅実な作品である。夢中での猪との

対峙は、自己存在の危機を我々に喚起させる。ただ、堅実なあまり、展開が通俗的で逸脱がないのが悔やまれる。

氏のエネルギーと情熱の奔流が、あと数歩のところでせき止められている。作者の才筆は疑うべくもないが、まだ若いということもあって、もう一作を待ちたいとの思いが拭えなかつた。

ところで昨今、受賞作の大衆性に関する議論をよく目に

するようになった。選考委員としては呆れるばかりである。小説とは最低限読者に訴えかけるものがなくてはならない。それが娛樂性であるかどうかは、個々の作品で異なるだろう。十把一からげに「大衆性」と論じられるものではないと私は思えてならない。

#### 空白の色彩

図書館一郎

今回、「六甲山帰り」を一番

に推した。六甲山からの帰路につく男が出会った女は、まったく生命力が欠如しているが、それがむしろプリズムの光のように澄み渡つていて好ましかつた。そして、色あせた男女を背景に、空白の六甲山が生々しい色彩を帯びて立ち上がつてくる。日常と非日常の交錯や、レンズの虚像を思わせる奥行き。ステンドグラスのような第一級の作品だと思つた。

田中氏の「バナナ農園」は渾身の作品だが、少々力がこもり過ぎている。女子学生たちの姿は瑞々しい感性で紡がれているが、肝心の農夫の印象が何一つ残らない。題材は良いだけに、失われた青春へが際立つてい。

筋立ての平凡さは、樺野氏の「センチメンタル・レイン」もそうだ。肉体と抒情の付け合わせに新鮮味がない。通り

雨と内面とが混濁していく女は現実の側に存在するが、相手の男は虚構の域を脱していない。本作は女よりもむしろ男を書くべきだと思う。

今回は全体的に若さを感じる作品が集まつた。その割には古典的な作が多く、感受性に富んでいるであろう若き作家たちが、こうした小説を執筆せねばならない意味について、改めて考えさせられた。

## 正直な感想

明太子

今回は特に推したい作品を決めずに先行に臨んだ。議論を重ねていく中で、「六甲山帰り」が一種の不思議な浮遊感とともに浮上した。六甲山から帰路につく登山客の男は、

れが神戸という土地とも響き合っているように思つ。意図的に省かれた六甲山に少々あざとさを感じないでもないが、受賞作として異論はないが、

かつた。

田中氏の「バナナ農園」は、繊細な筆致で農家の男と若い女子学生たちとの交流を描き出しているが、典型的な群像劇の域を脱していい。バナナの皮を切り刻む少女だけが

むしろ農家の男よりはこの少女の方に焦点を当てるべきだつた。少女を曖昧に受け入れる語り手の田は、あくまで彼らの平面的な関係性を映し出さに留まっている。「」のよくな語り手への不満は「猪狩り」にも感じた。私小説としての系譜を踏むべきこの小説があくまで主人公を突き放した第三者の冷たい田で語られることが、私には不満であった。樺野氏の「センチメンタル・

「レイン」は秀作である。古典的な男女の姿を投射する兩の描写は、ともすれば単調になりがちな小説世界に広がりと深みを与えていた。前作の「土禁」よりも練り上げられた作だと思う。惜しむらくは、最後の安易な和解と認容の提示で、それがこの作を観念的な世界に閉じ込めてしまつてゐる。この作品にはむしろ、男を突き放した着地こそが必要だったのではないか。

白田氏の「漂白」は、幼さばかりが目についた。主人公の少年と父親との確執が工丁イプス的図式に収斂されるものでしかなく、読後に残るのは妙な古臭さと未熟さである。漂白というには、染みが目立つ作品である。

近年では、賞の大衆化とか話題性重視だと世間で騒がれているようだが、ぜひとも一度討議の様子を見てもらいたい。重厚な名作と話題性

というのは対立関係にあるものではなく、しばしば両立するものなのだ。活字離れの中、その活字で飯を食っている身としては、この人が受賞すれば話題になるかもといふやましい気持ちが一切浮かばないわけでもないが、やはり作品の質こそが第一であるという信念は、一瞬たりとも忘れてはならないと改めて身が引き締まる思いである。

## 選後感

鮎山 腹美

「六甲山帰り」は、モノクロな作品世界の透明感が胸に染み入るように入ってきた。淡淡とした語りと停滞した時間が、神戸という歴史的な地で展開されることによって、静的な男女の交流にどこか日本的な美すら覚えてしまう。

「バナナ農園」は、巧みな筆力に舌を巻いた。作中に溢れている若者の活氣は、単なる青春小説とは違い、時代に対するかすかな屈折を孕んでいる。平和な世界の停滞、樂観に滲む不安は、まさに現代の亀裂を鮮明に切り取っている。前作の「郵便配達員」のときから田中さんには注目している。たが、いよいよ本領を發揮してきたなという印象だ。「六甲山帰り」と「バナナ農園」とで迷ったが、小説世界の奥行きという点では前者に軍配が上がると思った。「センチメン

タル・レイン」は、男との決別を経た女が、精神的にはその男との非接触型の恋愛を繰り広げるところを面白く読んだ。ただ、そうして纖細に積み上げられた男との非接触の和解が、最後に単純な接触の形で実現するのが、本作を卑小でちぐはぐなものにしてしまっている。「猪狩り」は過度にハードボイルドな文体が目について、中身の印象が削がれていいく面がある。貧弱な文

学青年の夢に猪が現れるといふ筋立てには、小説の萌芽を見出すことができると思ったが、夢の中の猪を狩るラストの展開が物足りない。実体を持たない猪が現実に着地する機会を逃してしまっている。実際に惜しい作品だと思った。

「漂白」は全体的に文章の拙さが目立つ。文学を表面的になぞつただけで、新たな文学を生み出す土台に踏み込めていない。父から逃避する主人

---

公の目線も単調で、作者の若さゆえの粗削りとしても粗が目立ちすぎている。上辺だけの題材や言葉を並び立てるよりも、白田さんの深部にある文学を掬い上げてもらいたいと思う。

#### 初選考会を受けて

美田民 苫戸

臨んでいると知り、興味深々と一種の喜びを感じつつも、よりいっそう氣を引き締めることとなつた。文学といつものはどうしても相対評価になる運命なのだが、その中でもなるべく個人的嗜好と批評とを切り分けて、作品本位な評価をするよう心掛けた。

一番に面白く読めたのは、「猪狩り」だった。弱肉強食に直結する草原という場で繰り広げられる、静かな絶望と

情熱・野性と人性とのせめぎ合に感じ入った。文学にしか成立させられない世界に我々を誘ってくれる、まさに小説らしい小説だと思つた。私はこの作品を一番に推したが、選考会で評価する意見はほとんどなかつた。

「センチメンタル・レイン」は力作だが、少々美しくまとまりすぎていて、安易な男女の恋愛小説に堕してしまつてゐる。「バナナ農園」は読みや

すい作品ではあるものの、熟した甘美なバナナの重厚な描写に対し、切り刻まれて黒ずんでいく皮の挿話があまりにも軽い。両者とも作者の才気には疑うところはないだけ、従来の枠組みの中に收まつている印象を強く受けた。

白田氏の「漂田」は、ペンキ職人の父への葛藤を抱えた少年が、父の仕事着を漂田する場面に寓話的なものを感じなくもないが、類型のパッチワークの中でアイデアのみが上滑りしている印象を受けた。

いた美しい山岳にピントを合わせた方が、男女・生死・往復・山海といった多重な対立関係が鮮明に浮かび上がつたのではないだろうか。

今回、初めての選考会にあ

たつて、候補作をいただいたその日のうちに全ての作品に目を通した——ちょうどその日は帰省予定で、電車の中で読んだ——のだが、個々の技量の高さの割に、後日まで鮮明な像を描く作が少なかつたのは少し残念であった。

核なき作家

月見 場亞我

権野氏の「センチメンタル・

レイン」は、女の持つ抒情性

と驟雨との響き合いが凡庸に思われます。情夫を捨てた女と描写は、前回の「土禁」と共通するものがありますが、「土禁」の方がまだ幾分か生硬ながらも情念がこもつていました。「六甲山帰り」は、病を抱えた女の表象が、むしろ作中に現れぬ六甲山の悠々たる姿を濁らせていて、作品を二流に押し下げていると思われなりません。

今回は特に推したいと思つ

作品がありませんでした。技巧を凝らし、奇を衒つたものが多く、個々の筆力は認めるに足るとしても、小説 자체から受け取る印象は乏しいと言わざるを得ません。自身の核を持たないのが、平和な世の中で育つた現代の作家の弱点なのかもしませんが、個々の文学の核が何か、改めて向かい合う必要があるでしょう。

朝にパン

荷輪治吾郎

甘いものが食べたかった。食堂で夕飯を食べた帰り道、デザートになるものを求めて駅内部のパン屋さんに寄った。以前同じような時間帯に通りがかった折に、このお店ではタイムセールが行われているらしいと知っていたからだ。なるべく安価で甘いものを。そう思ってお店に入った。今は秋、食欲の秋。棚には秋のおいしい食べ物を使つた期間限定のパンが並んでいた。人は季節ものに弱い。少なくとも私はそうであるため、自然とそちらに目が行く。中央の台の上、秋の味覚を取り入れた様々なかつらとしたパンが、橙色の照明の光を受けている。普段パン屋さんでパンを買うことの無い私の目に、魅力的に映る。甘いパンを一つだけ。そう決めていた心が揺らぐ。そういえば明日の朝ごはんが無いな、と思ったのは、この欲を正当化するためだつたのかも知れなかつた。結局、五分ほど店内をうろついた末、二つパンを買うことにした。一つはチーズたっぷりきのこピザ。直径一五センチほどのピザの真ん中にきのこがちよんと乗つている。きのことパンという組み合わせに惹かれた。チーズの焦げ目が、俺は旨いぞと囁いている。朝ごはんにしようと思つた。もう一つはスイートポテトデニッシュ。ピザの直径と同じくらいの長さをしており、表面には黒ごまがぱらぱらと散らされている。さつまいもなので甘いのは確実であり、

なおかつ食いでがある。価格が比較的優しかったのが決め手だった。安めのパンを選ぶから、もう一つパンを買ってもまだ大丈夫、と言い訳が出来る。何が大丈夫なのかは知らないが。

お会計を済ませてほくほく顔で帰途につく。家に着いていざデニッシュの入った袋を開封しようとした時、自分の中にあつた甘いものを食べたいという欲がしぼんでいるのに気がついた。特別な買い物をした、という事実で満足出来たらしい。ならばこのデニッシュをどうしようかと考え、きのこピザとともに明日の朝食とすることにした。せっかくなので、久々にちゃんと温めて食べようと思った。ついでにスープ的な物も飲めたら最高だ。にこにこしながらパンを冷蔵庫にしまった。ちなみに、甘いものを摂取するという決意自体に変わりなかったので、買っておいた甘酒を温めて飲んだ。この甘味、どうしてかみたらしの甘味を想起させる、と思いながら飲んだ。味の感じ方がおかしくなつていなか、と、我ながら不思議に思う。

翌朝、もとい先刻。パンを加熱するのに必要な金属プレートを洗った後、レンジにセットする。取り出したパンをプレート上に並べて、説明書を見ながら操作する。加熱を始めてしばらくすると、パンの香ばしい香りが台所に充满した。これだけでだいぶ幸せな気分になれる。ぼーっとし

ているとレンジが音を立てて止まった。その数秒後に小さな破裂音がしたので、あわててレンジの扉を開く。ピザが爆発したのかと焦つたが、そんなことは無かつた。いそいそと花の絵があしらわれた平皿にパンを乗せる。デニッシュの表面がやや焦げてしまつたが、およそ問題無く温められていた。本当はステップと一緒にいただきたこうと思っていたが、加熱されて照り輝くパンを前にして、今すぐ食べたいと思う心は止められなかつた。窓際の椅子に腰かける。予報では今日は雨だと聞いていたが、今は日が差していた。日光の温みを背に受け止めながら、ピザパンに口をつける。もちりとした生地には黒ごまのようなものが練り込まれていた。チーズの旨味を味わいながら食べ進めていくと、お待ちかねのきのこに行き当たつた。生地のもちもち食感に、きのこの控えめな歯ごたえが加わる。このきのこは、まいたけだろうか。きのこは他の食材とともに用いられた時、その真価を發揮すると私は考えている。このチーズピザに乗せられたきのこも例外ではなかつた。いつかきのこを使った料理を作ろうと決意しながら、きのこピザを食べ終えた。ノータイムでデニッシュを手に取る。一口かじると、ぱりぱり感を取り戻した生地の層が立てる軽やかな音とともに、さつまいもの優しくしかし確かな甘さが感じられた。黒ごまの風味も良い。

デニッシュも温めて正解だったな、デニッシュ生地を考えた人は素晴らしいな、と思いながら、少しずつ食べていく。完食後、やはりスープが飲みたいので、マグカップになんちやつてトマトスープを作り、冷ましながらちびちび飲んだ。作り方については、マグカップにスープを入れている時点で若干お察しだとは思うが、料理好きな人やちゃんと料理をしたい人の反感を買いそうなものなので、ここでは伏せることとする。贅沢に時間をとつて朝食を食べるのには久しぶりな気がする。心が満ち足りる、素敵な朝食となつた。

二〇一三年一〇月二七日朝



漠々

荷輪治吾郎

大きな水の塊が立てるような音が聞こえた時、私の頭の中で、くじらが水面に落ちた。音のした方を振り返る。たぶん、私の横を流れる川の上流の方。立ち止まる。じっと見る。けれど、暗い中では、遠くの川面の様子は見えなくて、結局何もわからない。仕方が無いので、前に向き直つて歩き始める。

大学からの帰り道。雨はしどと降っている。もう冬だから、風は冷え冷え吹き渡る。手袋をしていても、指の先が痛んだ。その節は、川に落ちている石みたいな、青黒い色をしているだろう。一刻も早く家に帰りたいけれど、それはもう少し先になる。買い物に行かないといけないのだ。大学で食べるお昼ごはん用のパンが要るし、もうじき家のお米が底をつくから。予備のお茶も買わないと。余計なお買い物はしないよう気をつけなきや。

買うべきものを考えながら、信号が青になるのを待っている。自動車が目の前でゆるやかに曲がる。そのヘッドライトの先で、雨粒がちらちら白く光る。マリンスノーの浮かぶ深い海で、大柄な魚が目だけぴかぴか光らせて遊泳している、ような、そんな幻を見た。きっと、雨降りの夜の中にいるせいだ。それと、ちょっとおなかが空いているせいだ。おなかが空くと、かなしくな

る。かなしくなると、思考が鈍ってしまって、うまく行動出来なくなつて、ますますかなしくなる。こんなかなしさをごまかす方法で私が知つているのは、ごはんを食べること、眠ること、それと、夢を見ることだ。意味も正しさも無い、美しいばかりの幻想を、少しだけ現実に持ち出してみることだ。だから私の頭は今、空想の海を思い浮かべるのに夢中になつてゐる。と、信号が青に変わつた。よちよち足を動かして白線を渡る。

スープーマーケットの雨よけに入つて、畳んだ傘をふるふる揺らす。大きな窓明かりが眩しい。あくびをして潤んだ眼には、余計に。困つたことに、手のかじかみと空腹に加えて、眠気もやつてきていた。早く家に帰りたい。うん、早くお買い物を済ませて、家に帰ろう。カゴを手に取つて、目的の棚から棚へ移動する。別段必要じやないものは視界に入れないので。けれど習慣とは恐ろしいもので、普段寄つてゐるお総菜コーナーにもつい足を運んでしまつた。揚げ物の色と匂いに、胃袋がきゅるりと身じろぎする。我慢しなきやという考え方から、値引きシールを見て、空腹に負けて、屁理屈こねて、とうとう、一番費用対効果が高そうなものなら買つてしまつてもという考えに移つた。あつちへうろうろ、こつちへうろうろ、お総菜コーナーを歩き回る。

その自分の姿が、ばら撒かれた餌の周りを回る魚の姿に重なった。ただ、実際それをしているのはかわいげのある水の生き物ではなくて、成人済みの人間なので、だいぶ恥ずかしい。なんとか店員さんの目も気にする。なので、ぱぱっと目の前にあるものを手に取つた。ほくほくコロツケ五つ入り。ご飯だけでは物足りない時の心強い味方なので、気に入っている。ちよつと油が染みてしんなりした紙袋をカゴに収めた。そして、これ以上は買うまいと頭の中で唱えながら、レジへ急いだ。

外に出る。小雨はまだ止まない。暖かい店内に慣らされていた頬が寒さに萎縮する。右肩には、パンと二リットルのお茶入りのバッグ。左肩には、コロッケと二キログラムの米袋入りのバッグ。両肩に掛かる重さがだいたい同じくらいになるよう引っかけて、ゆらゆら歩く。冬風でおこが冷やされていく。今日もまた買わなくてもいい食べ物を買ってしまったなあ。眠たいなあ。早くごはん食べたいなあ。肩が重いなあ。取り留めの無いことばかりが、冷たいおでこの裏で浮かんでは消える。デキる大人は、こんな何でもない帰り道の時間だって、明日のこととか、仕事のこととか、実のあることを考えるのに使うのだろう。私はいまだそう在れないでいる。ち

よつとだけ肩を落とす。いや、両肩の荷物のせいでもう下がってはいるのだけど。

そうこうしているとアパートに着いた。玄関のドアを開く。一拍遅れて点いたオートライトに  
出迎えられる。うん、ただいま、今日も寒かつたよ。濡れた傘は開いたままドアノブに引っ掛け  
る。体の両サイドに荷物があるせいで狭くて歩きづらい廊下を、のそのそ進む。「ひえー、さみ  
いよお」なんて声が出る。まあ聞く人もいないのだけど、なんて心の中では思う。明かりを点け  
て、人ひとりが暮らす空間。もう見慣れてきた部屋だ。バッグ二つ、リュックサック、パソコン  
用バッグ。大学生らしからぬ大荷物を下ろした。周りの大学生は大体かばんかリュック一つで行  
動している。みんな、要るものと要らないもの、大学の限られた時間で出来ることと出来ないこ  
とを判断するのが上手なのだろう。

外套一式を玄関のポールハンガーに引っ掛け手を洗ったら、冷凍庫からカチコチのご飯を取  
り出して、電子レンジの中に。五〇〇ワット、四分半で温め開始。暗い廊下に、四角いオレンジ  
の窓明かりが灯る。その間に、買ってきたものを仕舞う。コロッケは三つを深めの平皿に移して  
ラップをかけ、冷凍庫の中へ。明日のごはんのお供とするのだ。一度冷凍されたコロッケは、レ

ンジで温め直すと、心なしかもちもちした食感になつてゐる氣がする。最近発見した、生活に細やかな幸せをもたらす小ネタだ。もつとも、他のお店のコロッケで試したことは無いし、厳密に温め方を定めているわけでもないので、あんまり再現性は無い。何をおいしいと感じるかは私の主観でしかないし。

晩ごはんを食べる間に洗濯を済ましておきたくて、衣服やタオルを洗濯機の中に放り込んでいく。洗剤を注いで蓋を閉めた時、少し前に温めを終えていた電子レンジが、早く中身を取り出せと言うように、ぴぴぴと音を立てた。「はいはい、お待たせ」あちあちのご飯を取り出す。人は一人で暮らしていると独り言が増えると、いつかのどこかで聞いたことがある。私もその一人らしかつた。家電に話しかけることが実家にいるときよりも増えた気がする。一人が寂しいわけではないけれど、人でなくともいい、誰かと暮らしを共にしているような、そんな仕草をする方が、生活がちょっと楽しくなるので。

そういうわけで、沸騰してぴーぴー騒ぎ立てるやかんに「待つて待つて」と言いながらIHコンロを止める。お味噌汁を作るのだ。市販の小口切りのネギ、乾燥わかめ、小さいスプーンです

くい取った味噌を入れた器に、お湯を注いでかき混ぜるだけの、簡単お味噌汁。お手軽で大変よろしい。コロッケをレンチンしても良かつたけど、お腹を満たしたいという欲がいよいよ大きくなつてきたので、そのままご飯とお味噌汁と一緒に運んで、席に着く。「いただきます」まずはお味噌汁を一口、それからコロッケをおかずにはかはかご飯を食べる。「うま～……」コロッケは大体じやがいもから出来てるので、炭水化物で炭水化物を食べていることになるけれど、食べられるのだし、おいしいので何だつていい。

人の声はない部屋の中で、黙々と箸を進める。ドア越しに、洗濯槽が回る音、その中で水がぶつかる音。窓越しに、歩いていた時よりも強くなつた雨脚、それが建物や道を叩く音。こうして一人で静かに食事をする時間を、私は気に入つていて。それに、洗濯をこなしたり、アイロンがけをしたり、部屋を掃除したりするのも、嫌いじゃない。生活を維持するための活動をしている間は、なんというか、人としてふさわしく生きているような感覚が与えられているのだ。一方で、この部屋に引っ越してきてから、半年ほど。故郷を離れ、一人で生活をしているのを、まだ夢のように感じている節がある。生活の活動をする中でときたまこの現実に気がついては、飽

きもせざ驚いてる。そして不思議な気分になつた私の頭には、最近お決まりの空想が浮かぶ。人一人が暮らすこの部屋は、独りで暗い海の中を彷徨う潜水機のようである、と。そして、私はその唯一の乗組員で、世界の冷たさや重さから隔てられた閉鎖的で小さな舟で細々と活動しながら息をしている。そんな人生を夢見る。実際は潜水艦の中での生活は過酷なことだから、これはしようもないいち文系大学生のイメージに過ぎないのだけど。

窓の方を見やる。閉め切ったカーテンの向こうには、真っ黒な景色と、家や集合住宅の窓明かりがあることだろう。その明かり一つ一つが誰かの営みの証なのだ。そこで生活している誰かが放つ光なのだ。空想の枝葉を伸ばす。舟の窓から、遠くに光る無数の舟の窓明かりを眺める。世界にたくさん的人が生きているのを確かめながら、その光とは触れ合うこと無く、この舟での生活は続していく。なしたこと、日々考えていることも、ただ私の生活を支えるためだけに在り、この空間の内側で完結していく。

なんて感傷にふけっていたら、洗濯機が一仕事終えて私を呼ぶのが聞こえた。早く干さないと生臭くなつて、顔をしかめる羽目になる。晩ごはんも食べ終わつていたので、丁度いい。あくび

をしながら音のした方へ向かう。洗濯物を干したら食器を洗って、あつたかいシャワーを浴びて寝支度をして、お布団に包まって眠りに就こう。眠ること、夢を見ることは、気力を補充する大事な人間の仕組みだ。日付が変わってしまう前に目を閉じよう。明日また生きるためにも、何か明るい夢を見れたらいいな、なんて思いつつ。



# 空想の秋

はにほ

私曰く、秋は最高だ。

快適な気温、美味しい食べ物、そして、あたたかな色合いに似つかぬ寂しげな空氣の匂い。命の危険を感じさせる灼熱の夏と、全てを凍てつかせる厳しい冬の間に存在するゴールデンシーズ。一年という大きなひとまとまりの内で、ほんの少しあしか採ることの出来ない希少部位。それが秋。

食欲の秋、芸術の秋、睡眠の秋、読書の秋……秋にも色々あるけれど、私はよくばかりなので、今日という日を使って全てを満喫することにした。

朝八時、起床。休日の私にしては割と早起き、かといって早すぎもせず良い時間。顔を洗つて歯を磨き、身支度もそこそこにキッチンへと向かう。朝ごはんは固焼きの目玉焼きを乗せたトースト、レタスとトマトとキュウリのサラダ、それとインスタントコーヒーに牛乳を注いだだけの冷たいカフェオレ。そこまで凝ったものではなくとも、これだけの朝ごはんを準備しようと思うと相当なやる気と根気が必要だ。ちゃんとした朝ごはんとは、贅沢なものである。

テレビをつけて、なんとなくやっている番組を見る。土日の朝は大体、路線バスぶらり途中下

## 空想の秋

車の旅をやっている。それか芸能人の対談番組。もしくはガーデニング、囲碁の中継。とにかく、休日の朝に見るテレビというのは、意思をもつて見て いるわけではない。

朝九時半。朝ごはんの片づけをしてから、さて何をしようかと考える。そういうえば、読もうと思つて買ったはいいが読んでいない積読がたくさんある。それらを読むことに決める。

本を読む体勢というのは何がベストなのか、私はいまだに分からぬ。外だともちろん電車の中で立ち読みしたり、机で座つて読んだりするけれど、家の中でそれをすると何故か損した気分になる。せつかく寝ころべる環境があるのであら、横になるなり斜めになるなり、もつと楽な体勢があるのではないか？ そう考えて色々試してみるのだが、横とか斜めとかになつて本を読むと、どこかしらが痛くなる。首だつたり手だつたりがしんどくなつて、結局もぞもぞしてしまい、やつぱり縦が一番だな、という結論になる。もつたいないことだ。誰か、読書をするのに一番楽な体勢を知つていたら教えて欲しい。

そうこうしているうちに昼の十二時になる。本があと十数ページで一冊読み切れそなうので、キリの良いところまで読んでしまおう。

十二時半。昼ごはんの時間だ。しかし困った、何か作ろうという気持ちにならない。まあそんな時もある。

そこで、ある飲食店のことを私は思い出す。いつも外に出ると通りがかるけれども、まだ行ったことのないカフェ。あまりに家から近いのと、雰囲気があつて入りにくいこともあり、中々行く機会に恵まれない。物理的な行きやすさを加味すると、ある意味どこよりも遠い存在といえるかもしれない。外に出ている看板によるとカレーライスもあるらしいので、昼ご飯に適しているだろう。

いつも外食ばかりしてはいられないのだが、私は今日を満喫すると決めた。きっと許されるに違いない。私は今度こそ丁寧に身支度をして、ちゃんとした服を来て、家からものすごく近いカフェ（カレーライスも提供している）に向かう。

十四時、カフェを出る。おなかも満たされて、程よい眠気が私を襲う。シャキッと目を覚ますためにも、少し歩いて帰ることにする。今日は天気がいいし、うろこ雲もあつて秋晴れを感じる。カフェから少しずれたところに商店街があるので、そこを散歩して帰ろう。毎日登下校で通つ

## 空想の秋

て いる道だけれど、私はこの商店街が大好きだ。

歩 いて いると、ス ーパーが 目に 飛び込ん でくる。せ つかく ここまで 来た のだから、何 か 買つて 帰 るのも 良いかも しれ ない。特 に 目的 は 無かつたが、私 は 立ち 寄ること に する。

入 り 口 すぐ の 野菜 コーナー の 所で、カボチャ が 売ら れて いるのが 見えた。そ の瞬間、私 の頭の 中に ポンつと 現れたのは、オレンジ色のカボチャマフィン。な、なん て 魅力 的 なん だ……こ れは なん と しても 作りたい。スマ ホで 軽く レシピを 調べて みる と、ホットケー キミックス が あれば カボチャマフィン が 作れ そ うだ と いう こと が 分か つた ので、製菓 コーナー に 行つて ホットケー キミックスも カゴ に 入れる。そ の 近くには デコレーション用 の チョコ ペンや 粉砂糖 も 置いて ある。やはり、お菓子 を 作るなら カワイイ 方 が 嬉しい に 違い ない。それも 買うこと に する。

十五時、帰宅。買つたものを 冷蔵庫などにしまい、早速 カボチャマフィンを作り始める。

卵 はあらかじめ溶いて おき、一口 大に 切つた カボチャを ラップをかけて レンジで 加熱。柔らかくなつたら フォークなどで 潰し、ペースト状になつたら 砂糖、牛乳、溶き卵、溶かしバターを加えて混ぜる。型に入れて、予熱した オーブンに入れて 焼き上がりを待つ。

マフィンが完成するまでの二十分はとても長く感じる。平日の朝に目覚ましが鳴り、ヌースーズを押して猶予を与えられている時の二十分と等価とは、とても思えない。

ソワソワしているだけというのもあれなので、ゲームをして待つ。面白いノベルゲームをしている時の時間の溶け方は尋常ではない。その性質をありがたく活用させてもらおう。予想通りすぐに焼きあがる。惜しみながらもゲームを中断して、ふんわりいい香りがするキッチンへ向かう。

開けてみると少し焼き色が足りないように思える。妥協しないぞ、と思いつながら一分ほど延長。今度は、オーブンレンジの前でうろうろと、追加した二分を待つ。

ついに焼きあがった。オーブンを開けるときつね色の焦げ目がついた美味しそうなマフィン！粗熱をとつてからデコレーションをして完成。記念写真も忘れずに撮つておこう。  
焼きたてマフィンが二個も三個も食べられるのは家で焼いた人の特権。少々割高になつたつて、手間がかかつたつて、お菓子作りをする価値があるというものだ。

ああ、今日はなんて良い秋の休日なんだ……この後は夕食を食べてから、早くに寝る準備を済

## 空想の秋

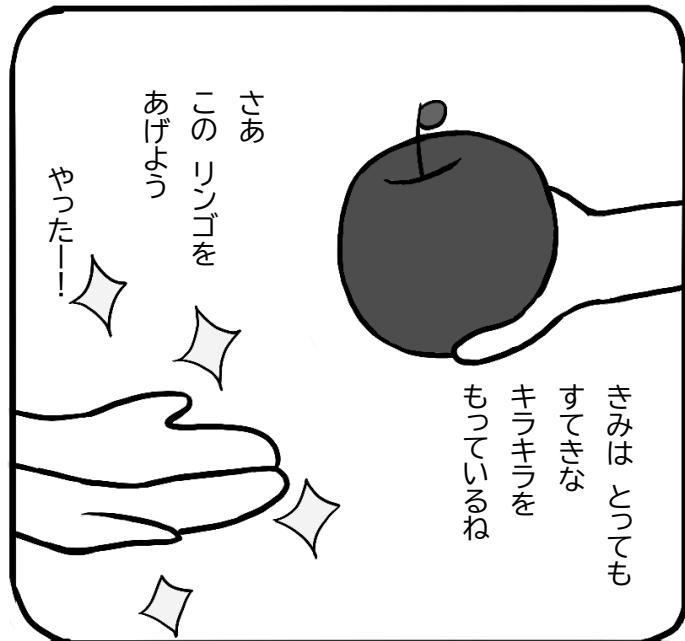
ませて、ちょっと勉強してから、気持ちよく眠りにつくに違いない……

……という理想の一日を夢みながら、今日も私はスマホ片手に、一日中部屋に転がっていた。  
惰眠の秋というのも、まあ悪くないものだ。



スルガマツ

なま



きらきら





きらきら





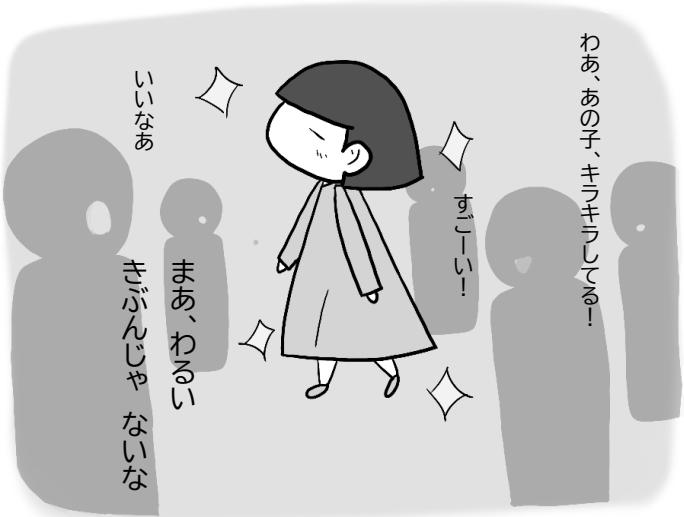
きらきら

ここからおこでよ





卷之三



きみたちの“それ”は  
素晴らしい！

どんどん やりましょー！  
どんどん 進みましょー！

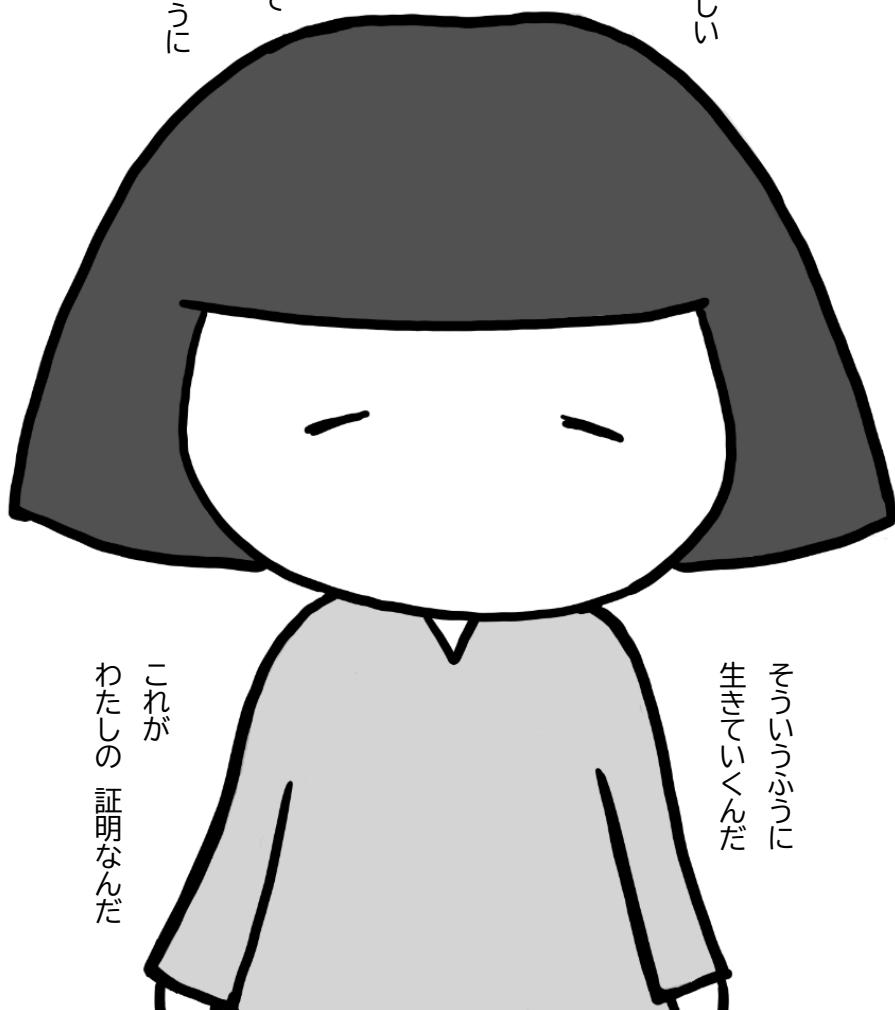
そうして きみたちは  
素敵で 素晴らしい 人材になるー！

もつともつと 上達して  
もつともつと 活躍しょー！  
人に みとめられて おいしい  
リンゴを 食べよー！

きみたちは もつと 幸せになるー！

きらきら

そうか  
それが 素晴らしい  
ことなんだ  
それが  
いいこと  
なんだ  
もっと うまく  
なって、  
もっと 成長して  
もっと 人に  
みとめられた  
なんんだ



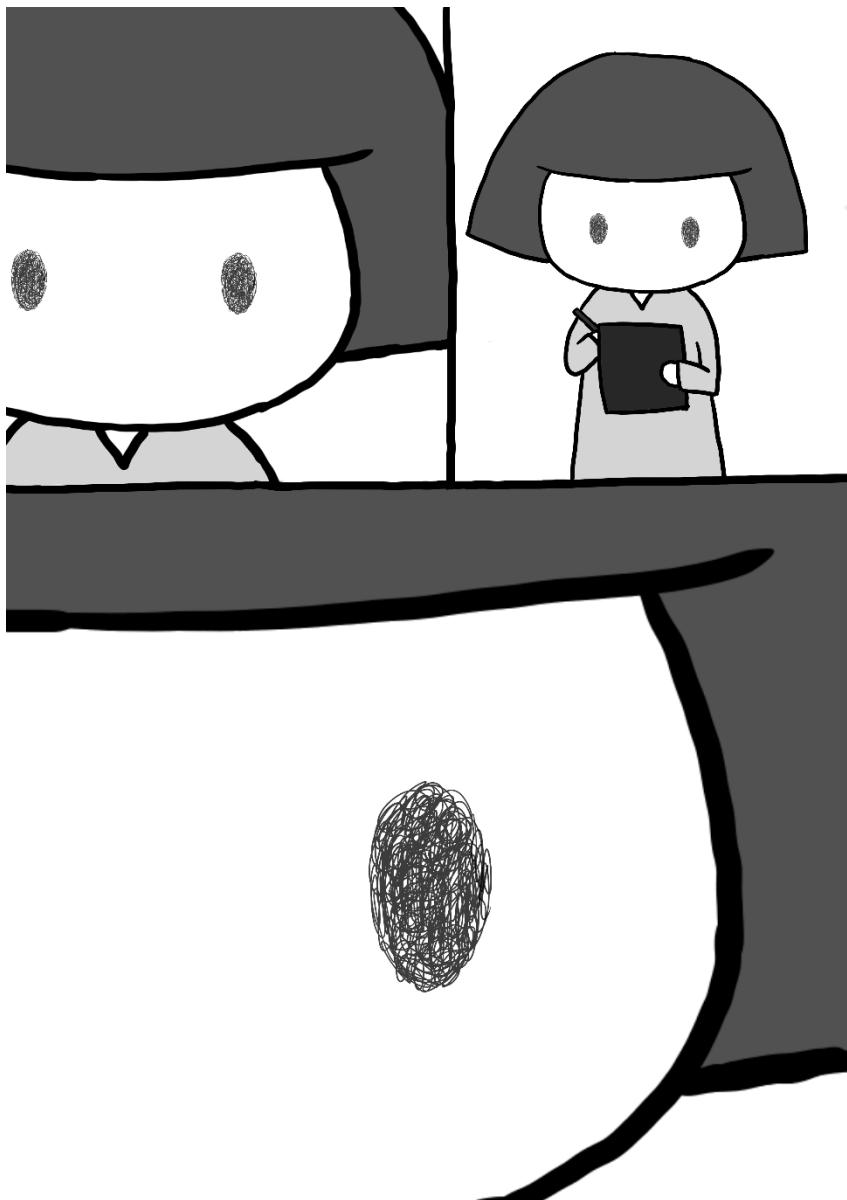


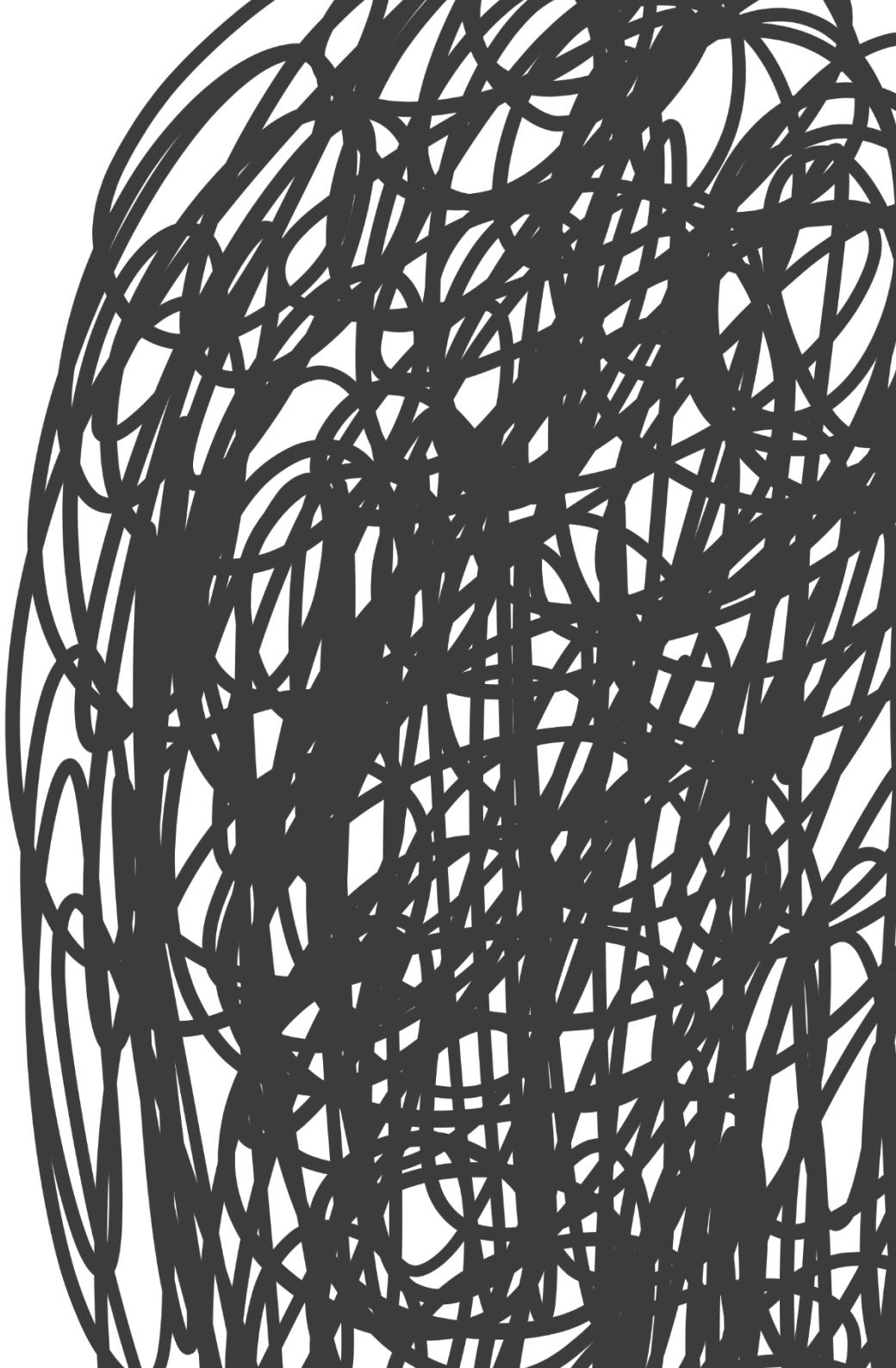
きらきら

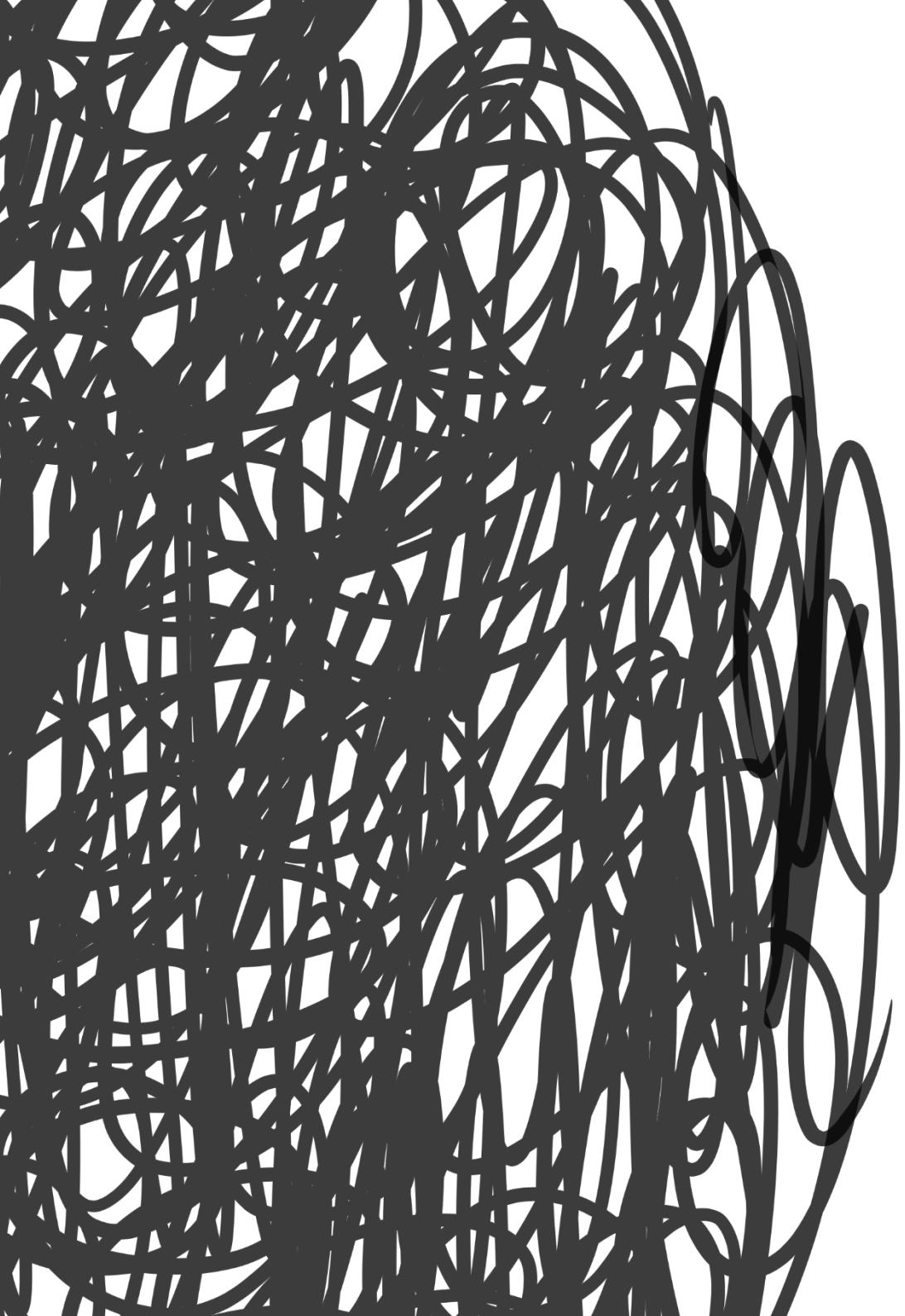


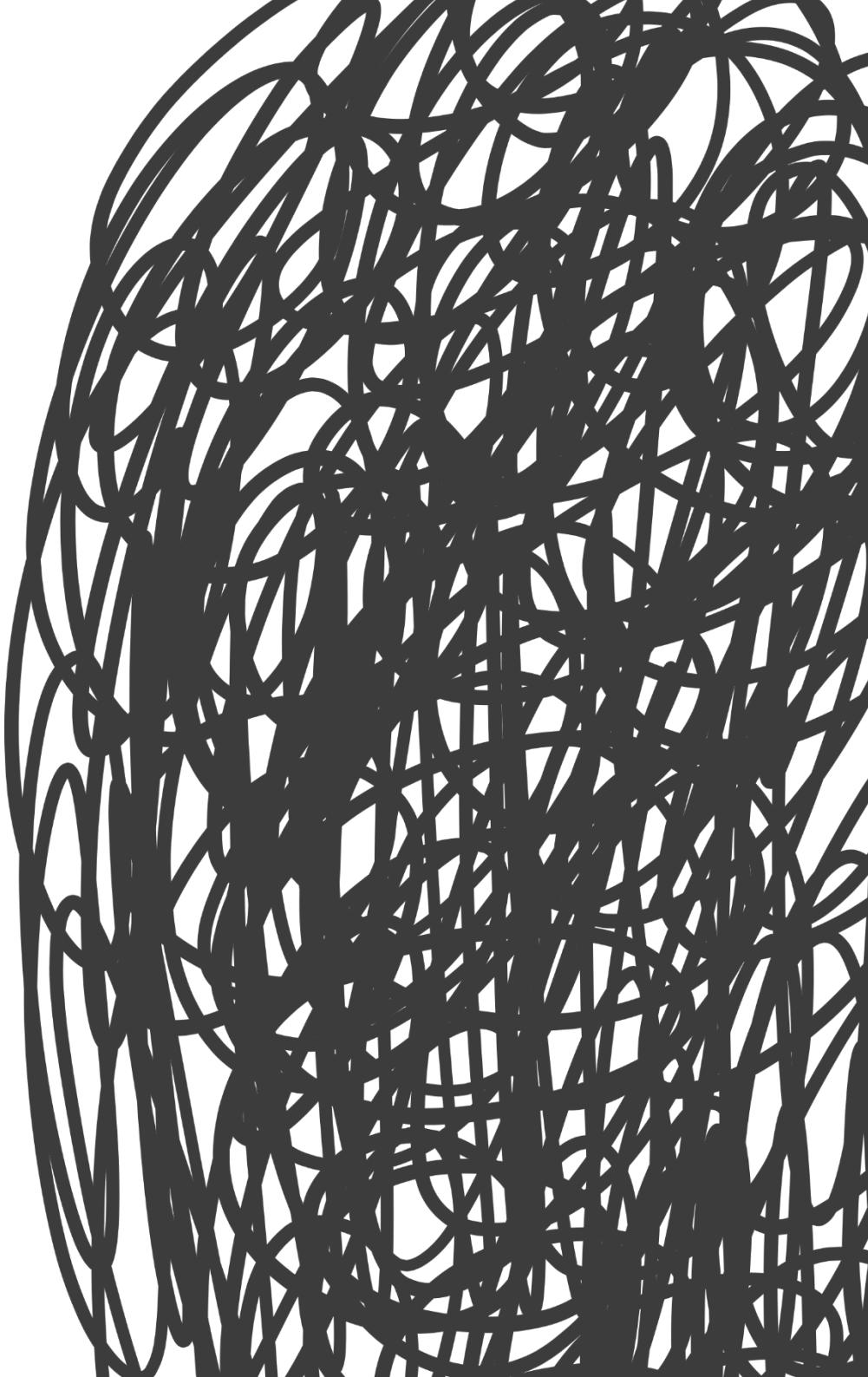
絵が描けない

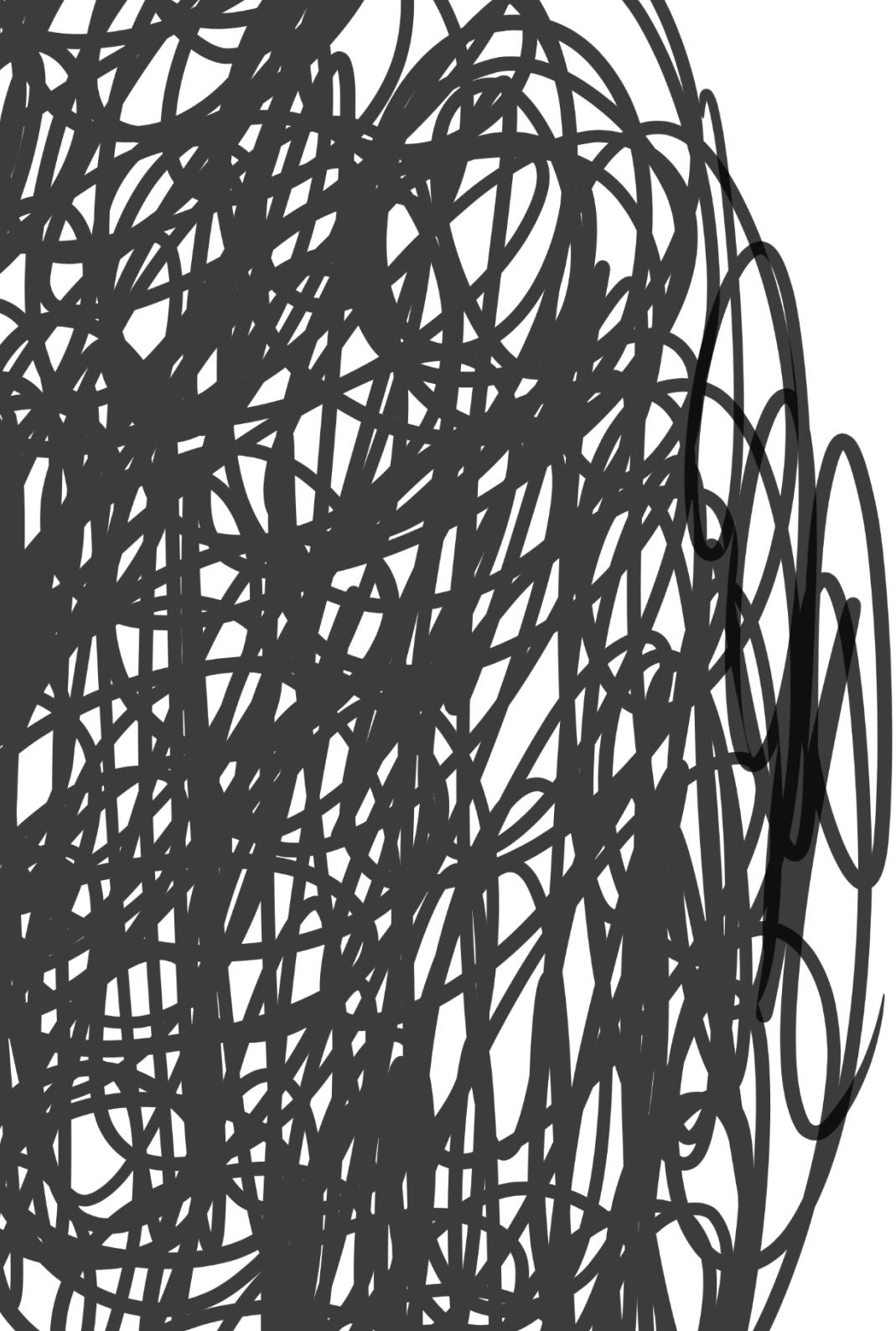


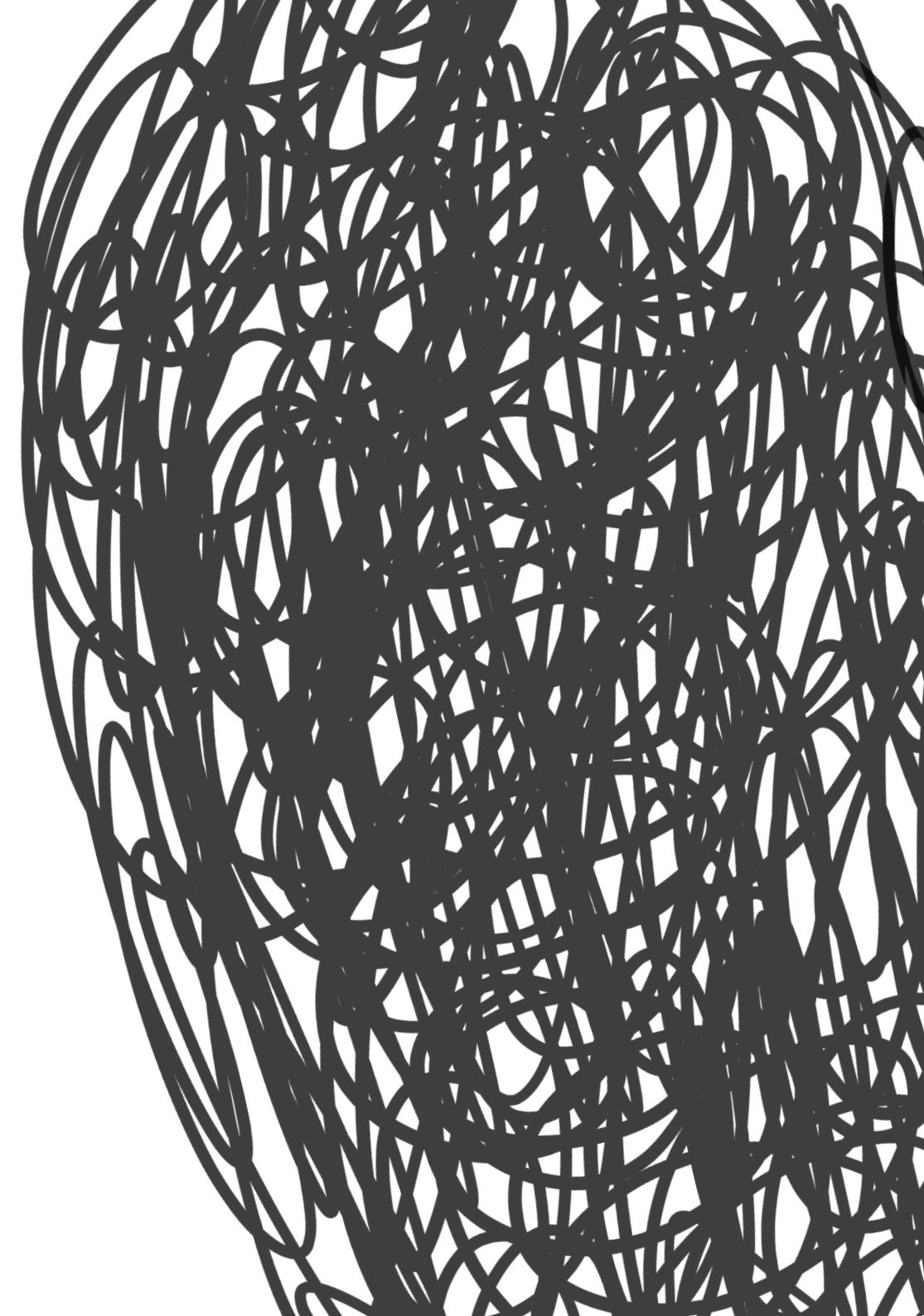








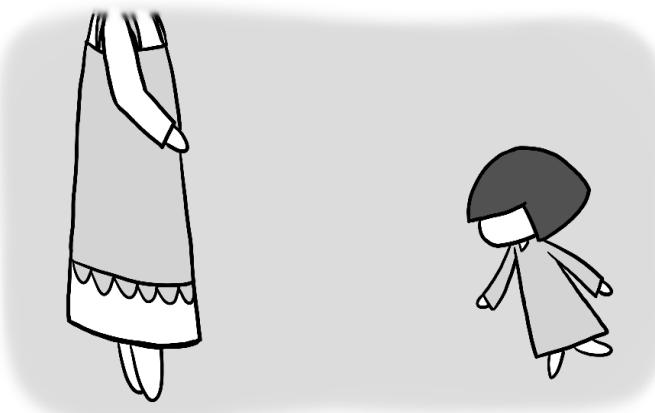
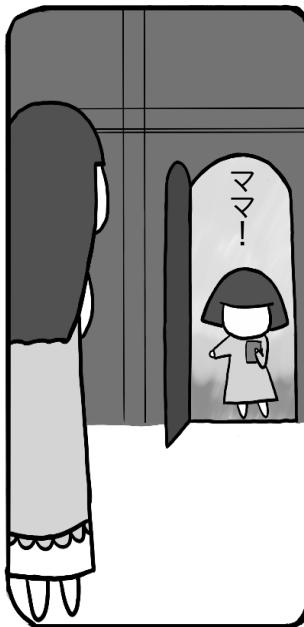




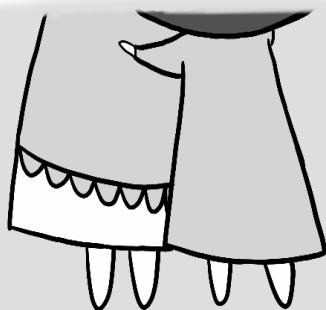


きらきら





ママ、わたし……



わたしの絵 たどり すゞくつたひで  
すゞくつて 言われぬための ものじやない

「これで おこしこなハグを 食べるくらこむり  
なんにもないわたしで



なにもないねって 言われて  
苦労したい

なんにもない はだかのわたしを  
みとめてくれる人は いないのかな

「んなのって おかしいかな

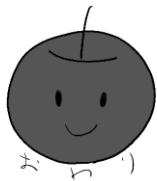
・  
・  
・  
コ



きらきら

はだかんぱつで  
生まれてきた ときから  
あなたはずつと  
きらきらしてこのよ





※P98 内の山の風景画は生成 AI によるものです。

臨界

親嘴鳴

踏切と青い光の殺虫灯

哀れな羽虫がぢッとはじける  
親嘴鳴

滅私集

後藤鐵式

## 序（読み飛ばしてよい）

なにびともここを渡りぬくことはできない、いわんや死者のことづけをたずさえては。——君はしかし夕ぐれともなれば、君の窓べに坐し、あこがれながらそのことづけを心に思ひえがくであろう。

手塚富雄訳 フランツ・カフカ「皇帝の使者」

ひとえに、滅私を目的として書き下ろされた。滅私は、全生命的な死や、一つの文学的活動の終末を意味するものではない。また、なにがしかの給金のためにちつと堪える役人のような、冬眠的態度というもので決してない。薦進のための一語である。

「私」の指すところは、個という語から限らず離れた、拡散的かつ膨張的な意識であるといえるかもしない。が、しかし、とりたてて「とはなしに」に沈もうとするような気分でもない。したがつて、「私」というあまりにも短絡的な語彙には、これ以降「退場願うこと」する。故、ここから先にホントウはない。

では、いかに滅するか。それは外的な肯定と内的な否定とによって行われる。滅私はまず、内外に充満した一切の現象群を、肯定といふまなざしを以て客体とする。この段階においては、なにひとつとして貶めら

れてはならない。例え、流線型の自動車や合皮のジャケットであつても、平等に肯定される。日和見か、否。博愛や友好には回収されない、自己愛の大風呂敷を裏返しに広げるのだ。この時、世界には、一つの人物をした真空が生じている。

次に、滅私は一つの内燃機関として始動する。内的な否定とは、あらゆる客体の通過によつて生じた感情のうち、可燃性のものだけを内に封じ込める抑圧的態度に始まる。ひとたびニューロンの閃けば、とめどない連鎖爆発が無尽蔵に破壊の力を以て、秩序の糸を解きほぐすために、ハイ・トルクの回転を生じる。詩的世界を起動するための破壊は、内臓においてのみ行われるのだ。こうして、たちまちに血液を沸騰させる爆発運動は、孤独に始動せねばならない。

そうして生じた内的な爆発は、膨大な煤塵バブーンを生じるはずであるが、しかし、その点は、未來の科学者が解決するだろ。触媒作用は破滅的演出を見事に丸め込み、新鮮なロマンをまき散らすのだ。滅私が、それを望んでいる。滅私は、未來の技法であるとよい。

それはそれとして。

このころ、食が細くなつた。一日はようやく、早巻に移ろいだしたようだが、内臓には、夏がこびりついている。食べられないのは、かなしい。嵌め殺しの窓辺で、秋を待つてゐる。腹が減つた。

## カノープス

アノ子をナニとも呼べなくなつた

弾ければ泡と呼んで

散れば花と呼び

忘れては思い出と呼んで

潰えては明日と呼ぶように

腐り切つてから恋と呼んだ

一步前に踏み潰した名も知らぬ虫に心で手を合わせ

一駅前に置きわされた生菓子を違う店で買い直し

一年前に吐いた言葉をせつせと上塗りしているうちに  
すつかり何もかもが

恐ろしいまでの平凡に飲み下されて

千々の刹那を縷々として堆く積み上げたハイ・タワーに  
地平線上の秘匿星まで見透かす

タオル地のブランケットと

蜂蜜の入ったエスプレッソと

ハイライトの充分な

二人がけソファー付きの展望室を夢見るうちに

名残る

ホットワインと一冊の文庫本

それから小洒落た丸いミント缶

自意識の集積をワン・ルームと呼べば

それら、根なしの占領地

アケられるのを待つ

いじらしさ

咽頭膜仏ノドボトケが唱える

願わくば  
コヒネガ  
庶幾コヒネガわくば

アノ子に……

何を？

H A H A ! こんなものは、詩ではない。

すつかり、弱くなつた。ヤダネ。

## プロキシマ・ケンタウリ

特級の白熱球に

網膜を焼いて

一匙の矮星光を

知らない

から

ためらわず

捨てられたバス・ボム

全ての光に捨てられた

そう思っていただけなのだ

hidden hidden

盲目のプラネタリアン

トタンの天井に

あまねく星を見る

逃げている。筋を捨て、道理を捨てて、音律まで捨てたつもりで、其の実、見失っていると、知らぬふりで。まったく、ウヌボレだ。救いようのない、ウヌボレだ。壊しちまつた、バカだから。そう言つて、逃げている。

卑小さを知ったわけじゃない。反省なんて柄でもない。ただ、恐ろしいのだ、いつの日にか終わりの来ることが。もう遅かつたと、繰り返すことが。それなら、初めからナニモ無ければいい。嘘だ。

文学と、軽々しく書く奴が嫌いだ。詩や散文と、恥づかし気もなく呼ぶ奴が嫌いだ。コトバを好きと言う奴が、大嫌いだ。奴らは、大した貴族様だ。円卓にぶちまけられたスクランブル・エッグを諸手に握り、げへら／＼と酔く貪つて、アア、確かにゲイジュツだ。

だが、そう書きながらも、己にはもう、これしか残されていないとさえ、思つていていた。たつた一つ差し伸べられた、冷たい梯子だと思つてみたい。必死のつもりで、決死のつもりで、イノチガケだと、思つていたい。臆病と、脳髄と、浸潤と、弱いから。弱いから――眩しくて、吐き気がする。

疑似重力下の窓辺で、べら／＼と酔うている奴は、死ね。  
だが、ヨイサ。少し眠る。

斧がふられる

見ていてくれ  
真二つにしてあげよう  
ベンチに座つておいで  
ハンカチを敷くからね

ふと  
アノ子が現れて、確かに羽衣が見えたのだ  
感謝し申し上げているのでござりまする

シナココノ  
真鍮の斧を構える  
四九つめの首もやはり  
ペコ・ロスと同じ顔

いつものことで  
切り株には首が置かれて  
キゴリ

一  
断

秘匿十字に祈つて

嘔吐も嘔吐もかなわない延々のまどろみに  
明日もまた、ナニヒトツ変わらぬ首を切らねばというのに  
おすまし顔で  
ペコ・ロスは眠っている  
夢だ  
夢だから  
目覚めぬことを  
目覚めぬことを

断

笑止！

赤子め

キモガゼメ

泣かねばヨイと思うたか

幻想に

レディ・メイドの感情を満載した

大泥舟を浮かべて

船底から採掘した泥団子を

どこへ持ち帰るというのか

洋上の機雷は欠伸もせず

オマエの漂着を待つて

オマエの漂着を待つて

赤く腫れ上がった腕に

水母クラゲのいたことを懐かしむ大詩人オロカゼノ

さあ！

ミルクもあんよもおしまいだ

感傷機関の発電所と

懐古の養殖場は

ボスト・オマエ臨時政府によって

解体されるのだから

醜くだらりと

口を開けヒラ

新たな航路を拓き

爆発するニューロンは

オマエを滅却し

言語消失点へ薦進する

過熱したディーゼル機関だ

今こそ

何を恐れるか

眼球へ脳髄へ潜航し

炸裂する——虚妄爆雷！

# 盲

幾億の鳥賊漁船が  
世界を曳航していると  
知つてしまつた

街角に首が一つ置かれた  
眼球のない

首――

詩が添えられている

破滅的熱光源たる太陽は

乾坤を一重に焼き切らんとばかり

頭上一億五千万キロメートルの宙に

屹立したというのに（昼が来たのだ）

消えゆくはずの星々は全天にひしめき

空間失調を引き起こす徹底的な夜と寸分も違はず

燐然としている

光！

全ての光がそこにある

超新星から銀歯まで

混じらず呑まれず

その横で、烏骨鶏が物語る

詩人は、黎々<sup>クログロ</sup>の両眼窩に、胡桃鉗の胎児を押し込み、響き得ぬ声で  
銘々が喘ぐままにしておいた（輪唱の出来るよう）。そうしている間  
だけ、詩人には、全ての光が見えたのだ。

乳房<sup>チーザ</sup>を求めて膨張を繰り返す胎児らの喉頭膜<sup>ホウドウモク</sup>は、やがて、そのあまり  
の丸みに子を宿す。胎児の子らは、瞬く間に胎児の口から生まれ出て、  
鏡写しのキョウダイに恋をする。見えぬ、聞こえぬ、語り得ぬ、恋。  
うして、二人ともが身籠つた。胡桃鉗の胎児とは、腹に胎児を抱えた胎  
児の事だ。永遠の胎児は全てを知りながら、唇を持たなかつた。乳を飲  
めない胎児は、すぐに死んでしまうものだから、詩人はその肉体に輪廻  
を宿し、詩的生命の陶酔を、恋にした。旧刑法では罪だそうだ。  
かつて、銀河南方の享樂民族が性欲と呼んだこの延々は、ほんの戯れ  
に作られた。瞬く間に絶滅した彼らの遊戯は、盗掘家らによつて祀り上  
げられ、今では、滅私と呼ばれている。

## 触

「耳かきをする」を趣味にしているとかえつて垢の貯まるのを待つようになるひとまずこれを触とする

シンクに皿の重なっている内はよいがまな板までも連なると

いけない

「皿洗いをする」の集積に倦怠では飽き足らず  
触だ／＼と駄々を捏ねる子らは  
ミキサーを取り出した

母によつて一つの宣言が投下された  
それは

「掃除機をかける」を行うためのもので

じわ／＼と通電する

掃除機の音掃除機の音掃除機の音掃除機の音掃除機の音掃除機の音掃除機の音  
あ、×××——清潔……「掃除機をかける」……触。始まつ  
ば、ば、×××——ば……「掃除機をかける」はじまつ  
てしまつた！

掃除機の音掃除機の音飛行機の音掃除機の音掃除機の音  
子——「毎日」—「ト」—「1」+「リ」そのこころは「球根を蝕んで力一  
ネーションが生える」となるだらうか。

子——ふむ、耳糞がぐず／＼だから、君のをよこせ。

子——ぐず／＼せずとは何だ、馬鹿。おい、飛行機が通つたぜ。

子——垢でも糞でも同じだ。おい、飛行機が通つたぜ。

掃除機の音掃除機の音掃除機の音掃除機の音掃除機の音  
**KNOCK KNOCK KNOCK**  
静寂の小休止

「世間話をする」のうちに

「耳かきをする」と「皿洗いをする」の双子は、忽ち老いしだれ  
「掃除機をかける」を残して、徹底忘却し——行方をくらませた

母、ひとり残されて、再びぐず／＼の生活が蝕指を……

掃除機の音掃除機の音掃除機の音

## アド・リブ——预定的帝王切開

ここは地続きか

親不孝な四三〇ミリのペツトボトル

ウォルター・V・スコットという名前  
恥かむ、葡萄酸いの

無香料であるということ

肯定的にサンダルを履くことの出来た十五夜

ミヴ・サフランニ

ヴォ・ボ・ヴォイスに一杯の夜光貝が注がれて

とつくり陶として、満ち／＼たVITAMIN

満腹のヴ・ヴ・白絹

とろん眼マナコに

北枕仙人を名乗る東海道の夢

色を知つて

一分間のハンド・メイド電化

ボルネオイズムの後継者は。

月桂樹を二日歩かせる

ずつくずつく

ニトログリセリュウム、過発酵

湖は小便小僧が、鍬一つで掘り当てた

七度のノックで甘皮が剥ける

一行余り（预定されていた）

## きと・きと——生活課月報

フルーツを切る上で気を付けねばならないことがある

一つは、切る前後、どちらかフルーツらしいかななど考えぬこと

一つは、切れ端のつまみ食いを忘れぬこと

カツパドキアは、それで減んだ

牛乳を注ぐ上ではさして慎重になることはない

花瓶の七割を超えないように（おおよそでよい）

二〇センチ以上の高さから注ぐ（これは必ず）

生ける花は、白を避けた方がよいが

百合はこの限りではない

七寸以下の花火玉の製法は次の通りである

N 極の二つ以上ある磁石を以て

西海岸の砂浜とコンクリートの隙間から

およそ一〇〇グラムの鉄を集め

なるべく細かなふるいにかけた後

ステンレスのボウルに入れ、軒下で寝かせておく

大気中に生息する、火薬酵母の機嫌がよければ

九日の内に、一尺ほどに育っている

運慶の氣分がしたら、荒い表面を削つてやる

ガリ／＼からチヽヽに変われば上等  
あとはお好きなように（浅漬けが美味）

水耕栽培は秋口に始めるのがよい

青魚は足が早いので

根菜の部類が初心に向く

水道局の定休日でない限り

失敗することはごくまれである

南方のご婦人なら心配は無用

蓮根だけはやめておくこと

花が咲いては

生真面目に暮らすことになる

晩夏の化粧は南向きで行うこと

北を向いては粉が浮く

襖があれば開き

亭主の安樂椅子には引つ越し願うこと

窓は閉じている方がよいが

雨の日には半分ほど開くこと

ぼつねんとした気分が

残暑、うんと美人によい

秋の知らせは、気長にお待ちいただきたい。

## ダル・バロス——ガルガンチュアの甘味

水道水が冷えていなくて、さら／＼としているのがさみしい  
長く飲み続いていると咽喉膜が焼け、爛れている  
酒も飲まず、叫びもあげず、静かに生きる

ヒト並のよい子だと思っているのに

一羽のセキセイインコを

打ち潰したような

螢光色の憂鬱が

あらわされると

げるを吐く

ミネラル

人間の知る

唯一の獸の渴きが

石灰と化した怪物の

ハレの気分でいたことも

睫毛の生え変わる頃に忘れて

二つ目のマウス・ウォッシュを買った

エタノールとメントールがあまりにさわやかで

夜明かしの前に呑み下した甘味が、肉体の興味を失わせた

遠い未来、太陽が紛れもなく赤だつたころ。幾度目かのまどろみに沈みかねた幻想皇帝は、女官を呼びつけた。女官は、股を開けば、アフリカをも容易く踏み越える、パンツスタイルの巨人である。無限の住居を一蹴りに越え、無限の宮殿を一難ぎで灰燼に帰し、瞬く間に皇帝の前に現れた。皇帝は埃をかぶりながら、恥づかしげに、寝物語を頬み込んだが、足の付爪にも満たない丈に、女官は声を聞いていない。退屈そうにもそ／＼と星を喰っている。皇帝は、千人の鍛冶屋に青銅の梯子を作らせ、三ヶ月の後に空へと昇った。腐臭を放つ女官の口元で皇帝は叫び願いあげる。皇帝の髪は白髪交じりになっていた。

皇帝の言葉を聞いた女官は、生真面目にその巨躯を横たえた。皇帝は喜び、一月と経たぬうちに梯子を駆け下りたが、眼前には、西向きに横たわった足があるばかりであった。皇帝は二千人の兵を連れて、馬を驅り、驚くべき速さで、大陸を駆け抜けた。道中、三千の渡り鳥と、その他あらゆる動物が加わり、万を超える地響きとなつた。

女官の胸元に差し掛かったころ、ようやく声が聞こえだした。それはあまりにも柔らかく、あまりに稚拙で危うかつた。膨張する自意識の膜と、それを貫く黒曜石の鎌のような鋭い陶酔は、皇帝にだけ感じられ、皇帝を残して、みな足を止めて退屈な眠りについた。

皇帝は一人、馬もなく、水もなく、ぼろきれのようになりながら千夜を越えて、とう／＼女官の口元にたどり着いた。どうに詰り終え、鼾をかく女官の垂らした唾液に、皇帝は性欲と甘味を知つたといふ。

## エントモファアガ・グリリの七つの宣言

### 一、牧歌だ

おおらかな平静がある。全方位への捕食的受容の照射は、最も不確かな、エクリチュールという名の泉を、蜃気楼として倒立させた。十全にイイカゲン製の塗膜を張られた今、その枯渇まで幻惑の靄の中に包み隠されている。牧歌的精神は生涯の健康によい。

### 一、百合はしら／＼と咲いている

元より、白色の標準器であったかのように。奴らは素裸で、内臓をさらけ出すことを誇るかのように、すましている。これは、引き抜いてしまわねばならない。隠し持った根の露になつた時、恥じらいが、黄色のあばたとなつて浮かび上がるのだ。そうでなくては、味気ない。あまりにも素朴に、煮込んでしまうのがよい。

### 一、破壊は恥じらいだ

これまで外部へ投擲されてきた否定／破壊は、モドカシサと恐れとから来る、逃避の手法であつた。以後この投棄を不法とする。否定は恥部

である。が、故に破壊するのではない。破壊の如き爆性は恥部であるが故に生じ、恥じらいが新動力の自閉鉱山となり得るのだ。恥じねばならない。放出口を失い、抑圧された恥じらいは、忽ちのうちに臨界点を迎え、胎内の秩序とともに爆縮する。過去、現在、未来を一身に仮託し破碎するディーゼル。これを、見事に運転しなくてはならない。

### 一、未完成だ

滅私は遂げられない。絶望もまた効力を持たない。滅私は生まれながらに永遠の未完成だ。驕進するうちに、自らも置き去りとする運命である。一切のクリシェを拒みながら、それに呑まれてゆくよう。やがて、いくつかの幻想を残して放棄されるであろう。予定された心停止を、嵌め殺しの窓に飾り、ニヒルを笑いながら進む。

### 一、だが、血は沸騰している

楽しみで仕方がないのだ。滅私は未来を発見した。それはまったく、カンブリアと同じ景色だという。新生の童どもが笑っている。奴らは赤を知らぬから。すべてが、煙熱の後に過去となる。新しさもまた、過去の観念だ。興奮だけが、喜びになるとよい。

一、いに宣言する

やがて、滅私は極大の暴力性を以て、自らを喰い尽くし眠りにつく。

思想も博識もついに抱くことの無いまま、形骸となるその日にこそ、盛大に乾杯のできることだろう。優美な屍骸に、なりたいと願う。

一、そしてこれは、未来のために。

滅私主義は、完膚なきまでに轟沈せしめること。

遊戯的態度を拒み、遊戯的であること。

# 断

響きに偏執し、無頓着であること。  
停滞することなく、図々しく腰を据えていること。

皆既日食の一日を除いて、絶えず傷つき続けること。

悲しみとアコガレに、恋せぬこと。

確かによじ登り、進んでいると、感じている。全ての光を天にみとめ、全ての肯定と否定を叫びながら、虚妄の終着点を目指している。



あとがき

しらす

今回は現役部員として寄稿できる最後の機会だ！ 書くぞ！ と意気込んだはずが、提出できたのは延長後の締め切り三十分後でした。いつものことではあります、編責さん、申し訳ありませんでした。部を追い出される前に、もう少し成長したいです。

本編読了前にあとがきを読むという派閥の方には軽くネタばれですが、今回の作品はいわゆる死不タです。それでも、鬱々としたものにはしたくない（苦手だから）……との作者の願望が働いた結果、何やらモノローグがはつちやけてしましました。これほど！ だの？ だの？ を書いたのは、大学入学以来初めてです。どうかそれが奏功しているよう、祈っております。

呉田仁

嘘号。だから嘘を吐くのだ。

谷山大哉

人物の内面をどうしても上手く書けなかつた。

まだまだ力不足。

締め切りを守れなくてすみませんでした。

### 黒田ももん

こんにちは。布団から脱出できない大学生もどきです。やるべきことが迫つて いるときに誘われた布団の中とは、こうも心地よいものですね。スリリングで大変素晴らしいです。

今回は、架空文学賞企画に参加しました。ちょうどこの文章を書いている二〇二五年の夏は、久々に芥川賞・直木賞ともに受賞作なしで話題となりましたが、文学賞の選考委員となつた錚々たる文豪たち（特に昭和期！）が、受賞作だらうと正直に評価していくのが好きです。さすがは文豪、着眼点の鋭さと選評の美文が素晴らしいです。

せっかくの企画ということで、今回レイアウトでかなり遊びましたが（編責さん、お手数おかげいたします）、実はレイアウトよりも選評を書くのに骨を折りました。結果、それっぽいけれども中身のないことを言つて いる謎の選評ばかりになりました。比べられる次元にすら立てており

ませんが、やはり文豪たちは異次元ですね。架空の選考委員と作家の名前があまりにもテキトーなのは、ご愛嬌です。思いつきませんでした。

### 荷輪治吾郎

編責さん、提出を待つていただきありがとうございました。短い話の方は過去に書いていた記録にちょっと手を加えたものです。ちょっと長い話の方は一回生の頃を思い返しながら書きました。なんか似たようなことばかり書いているなあという気持ちです。

### はにほ

エッセイ企画で嘘を書くという悪の所業をするのは、今春に続いて二度目です。本当にすみません。丹波篠山の黒枝豆（とてもおいしい）を差し出すので、許してください。

実は、これを書いている数日前から丁度気温が下がり始めました。急に寒くなつたので心の準備をする間もなく、着られる服が消滅しました。もうコートを着ている人がいてびっくりです。秋の到来にテンションが上がつて話を書き始めてから、このあとがきを書くまでの期間を秋と力

あとがき

後藤鐵式  
回答なし

親嘴鳴

一年、 齢を重ねて不自由になりました。馬鹿であります。

なこ

イ カ 墨 パ ス タ ズ ル ズ ル 事 件

ウントすると、その期間約一ヶ月。出番が少ないからか、なんかかっこよく見えますね！今まで簡潔あとがき派だったのですが、最近は長いあとがきを書く人の方が希少になってしまつたので試しに方向転換してみました。一ページくらいスペースに余裕があるのでこのまま一ページ分書き続けたって良いのですが、今回はこの辺で勘弁しようと思います。大変だったのでは次からは元の長さに戻っていることでしょう。



# 編集後記

## 編集後記

嘘、という単語からイメージされる印象として、まずプラスのものを挙げる人というのはあまりいないのではないかと思います。

「嘘はバレンタインや嘘じゃない」という言説もありますが、実際にはつじつまが合っていないものを合っているかのように見せる、というのはほとんどの場合大変難しいことです。バレた時に大ダメージを被るリスクは取らない方が良いよ、という理由で「嘘は悪いもの」という認識があるのでしきうが、生きている中で嘘を見かけることがある以上、嘘は社会にとつて必要悪だということなのでしょう。

このように大方はつかない方が良いものとして、また、真実と比べた時に劣るものとして扱われることが多い「嘘」ですが、この「嘘」号に関しては、人を傷つけるための嘘というのが少なかつたように感じます。募集をかけた時はどんな尖った作品が集まるんだろうとドキドキしたのですが、意外な結果ではなかつたのかもしれません。なんせ、どうぶん部員は優しい人達ばかりですから……。

## 編集後記

改めまして皆様、すがかる六甲祭号「嘘」をお手に取つて下さり誠にありがとうございます。同時に、製作に関わつて下さった皆様のご協力にも感謝申し上げます。作品を寄せてくれた部員の皆さんによつて、小説からエッセイ、短歌、詩集、絵本、選評（！）まで幅広い作品が集まり、読みごたえのある一冊となりました。

ぜひお気に入りなども探しつつ、本誌を楽しんで頂ければ幸いです。

編  
責

## どうぶん文庫最新刊

すぎかえる

太陽・沈黙

動と静が体現されたテーマ作品に加え、復刻企画・プロット交換小説なども収録！ 珠玉の小説達がきらめく短編集。嘘号と同時刊行。

新入生号

新入生号 2025

今年度の新入生初参加の一冊。新しい風をもたらす瑞々しい作品を堪能せよ！ 風物詩、新入生に紛れて参加する先輩の作品も収録。

すぎかえる

硝子

舞台指定小説集「ガラスの町」をはじめとし、旅日記、結末指定小説など企画も満載。プリズムの輝きを放つ、読みごたえ抜群の一冊。

## どうぶん文庫最新刊

すぎかえる

夜

明

け

人々が夜明けに見出すのは変化か無常か、はたまた希望か。五編の短編小説が薄明の美しさを色鮮やかに描き出す、奥行きのある一冊。

すぎかえる

月

耽美、憧れ、ロマン。月影に手を伸ばす試み、テーマ作品に加えて、童話改変小説など企画作品も充実。ページを捲る手が止まらない！

すぎかえる

路地裏・しらない

心のさざめきを忍ばせる「路地裏」、しつとりとした余韻を残す「しらない」。一枚の写真から物語を紡ぎだす、写真創作文企画も収録。

児童文学研究会は、六甲台第一キャンパス・グラウンド横にある部室で活動を行っております。  
興味を持たれた方は、ぜひお気軽に部室を訪ねてみてください。

ご意見・ご感想は下記アドレスまでどうぞ。

doubun12345@gmail.com

過去作が読めるホームページはこちら。

<https://doubun1234.wixsite.com/doubun>



X(旧 Twitter)では活動状況の報告を行っております。

[https://twitter.com/KU\\_dbn](https://twitter.com/KU_dbn)



すぎかえる 263 号「嘘」

---

2025 年 10 月 23 日 初版発行

執筆者：

編集責任者：

発行責任者：

発行元：神戸大学児童文学研究会

---